

HOSPITALE PROJECT



はじめに

HOSPITALE（ホスピテイル）は、鳥取市中心市街地に位置する旧横田医院の全館を使って、アートに関わる様々なプログラムを実施しているアート・プロジェクトです。

空き家だったこの建物を活用し、人々の創造性を高め、多様な価値観を認め合うコミュニティの核となることを目的に、鳥取大学地域学部が中心となり2012年に始動しました。

「HOSPITALE」とは、後期ラテン語で「来客のための大きな館」という意味を表わし、外来者を迎え入れる host、宿泊施設の hotel や病院を表わす hospital、またもてなしを意味する hospitality の語源とも言われています。この場所が現代のまればと（客人／異人）としてのアーティストを迎え入れ、さらにはアーティストがアートをもって地域の人々を迎え入れる、新たな「館」として再生することを願い、名付けられました。

HOSPITALE では、アーティストを招聘し作品制作・展示を行なうアーティスト・イン・レジデンス・プログラムをはじめ、展覧会やパフォーマンスといったイベントを実施するギャラリー・プログラム、日本国内外のアートの現場で活動する方を招いたレクチャーシリーズ、“読まなくなったけど捨てられない本”を集めてつくられた「すみおれ図書室」、人が集まる庭づくりプロジェクトなど、多彩なプログラムを展開しています。プロジェクト・メンバーには、学生をはじめ、地域の住民、団体など幅広いメンバーが集まっており、各々の興味・関心に合わせ運営に関わっています。

こうした実践が12年を迎えた本年、県内でアーティスト・イン・レジデンス・プログラムに取り組む団体のネットワーク組織が「一般社団法人T-Plat」として法人化され、団体の中間支援を行うだけでなく、調査研究や政策提言など、創造的な活動を持続的に行うための事業を展開させる新たな一歩を踏み出しました。これをきっかけにこれまでの活動のデータをまとめ、広く公開するアーカイブ事業に着手しました。さまざまな出来事が起こり続ける「プロジェクト」の全てを記録に留めることは不可能ですが、それでもここに活動があったことを残し伝えることが、今後のプロジェクトの展望や指針となり、さらには文化の発展に寄与することを願い、本アーカイブを上梓します。

HOSPITALE キュレーター／プログラム・ディレクター
赤井あずみ

- p.3 アーティスト・イン・レジデンスプログラム
- p.62 はじめてのアート・プロジェクトトークシリーズ
- p.63 アートを治癒するための『ホスピテイル』プロジェクト / 小泉元宏
- p.70 アーカイブプロジェクト すみおれ図書室 蔵書
- p.72 プロジェクトルーム
「知るのつくりかた」を知ろうとする / mamoru + 赤井あずみ
- p.74 寄稿 01 / 山本高之
人類のわかっている範囲での理解の達成度を競わされて、右往左往して自分に与えられた短い時間を消費してる場合じゃないよ。人類は世界のことほとんど何もわかってないんだから。
- p.76 寄稿 02 / 野田邦弘
廃病院を活用した鳥取のアートプロジェクト「ホスピテイル」——その始まりと影響
- p.78 寄稿 03 / 金井美樹
遠く離れた鳥取のホスピテイルプロジェクトを囲むコミュニティとの豊かな 12 年間
- p.80 寄稿 04 / 竹内 潔
新たな知を獲得する「社会教育」の場としてのホスピテイル・プロジェクト

アーティスト・イン・レジデンス プログラム

Artist-in-Residence Program

「HOSPITALE」

石田尚志、市川武史、森弘治、山本高之

Takashi Ishida, Takefumi Ichikawa, Hiroharu Mori, Takayuki Yamamoto

日時 | 2012.3.17 (土) - 3.31 (土) 10:00 - 18:00

石田尚志、市川武史、森弘治、山本高之という現代美術作家4名によるグループ展「HOSPITALE」は、旧横田医院を利用したアートイベントの第一弾として企画された。会場が病院(hospitale / ホスピタル)としての記憶を留める建物であったことから、その語源である「来客を迎える大きな館」を意味する後期ラテン語「hospitale」が展覧会のテーマに据えられた。2011年3月の東日本大震災とその後の東京電力福島第一原子力発電所の事故による未曾有の災害は、日本の社会的地盤の脆さを露呈させ、システム不全に陥った社会システムと民主主義への危機を実感させる機会となった。こうした状況下で企画された本展は、普段は意識することのない「死」とその裏返しとしての日常の営みや社会における人間の「生」について改めて見つめることで、危機を乗り越えていく意志と展望を描くことの試みでもあった。

展覧会に先駆けて、山本によるワークショップ「きみのみらいをおしえます」を4日間にわたって実施し、鳥取市内在住の小学生が作品制作に参加、新作の映像インスタレーションとして展示。展覧会初日には、小学生が扮した「占い師」が来場者の未来を占うパフォーマンスを実施した。また市川は、旧横田医院の病室から着想したヘリウムガスを注入した透明フィルムによる彫刻作品を新たに制作し、かつて病院として機能していた場所で過ごした人の気配を感じさせる彫刻作品を発表した。石田は会場の窓の形状と呼応するドローイングアニメーション《部屋／形態》と、路上に海水で線を描いていく作家の姿が道路を洗浄していくパフォーマンスにも似た映像作品《海中道路(行き・帰り)》を展示。森の出品作《Student Actors》は、非常事態が起こった場合の政府の対応策について、実際にあった国会答弁を台本に、演劇を学ぶ学生が芝居を完成させるプロジェクトを撮影した映像作品で、当時の政府の混乱状況を予言していたかのような世相を鋭く批評する展示となった。

展覧会初日には、市川と山本によるラウンド・テーブルを実施し、それぞれが手がけた新作についてのトークや今アーティストが表現する意義についてのディスカッションを行った。また、会期中には、鳥取市内で地域医療に携わる傍ら、1989年よりレジデンス施設を付設した多目的ホール・こぶし館の運営や、多彩な文化活動の企画を主催されてきた徳永進医師をゲストに、医療と芸術の現場に立ち会ってこられたこれまでの活動についての講演会を開催した。

[関連イベント]

山本高之ワークショップ「きみのみらいをおしえます」

2012.3.3 (土) 3.4 (日) 3.10 (土) 3.11 (日) 10:00 - 16:00

山本高之ワークショップ発表会 2012.3.17 (土) 14:00 - 15:00

アーティストズ・ラウンドテーブル 2012.3.17 (土) 16:00 - 18:00

ゲスト・レクチャー 徳永進「生きてく栄養、死んでく栄養」 2012.3.25 (日) 15:00 - 17:00





「CARNIVAL」

フジタマ、悪魔のしるし

Fuzitama, Akumanoshirushi

日時 | 2013.3.1 (金) - 3.31 (日) 10:00 - 18:00 ※金土日のみ開館

旧横田医院を活用したプロジェクトの第2弾として企画された展覧会「カーニバル」は、社会的役割・身分的距離の無効化や価値の転倒、聖俗の交代、生死の近接を特徴とする「祭り」をテーマに、京都を拠点に活動するフジタマと、建築をバックボーンに持つ演劇ユニット「悪魔のしるし」の2作家を招聘し、それぞれに新作の制作を依頼した。

フジタマは1月25日から27日にかけて短期間の滞在制作を行い、旧横田医院とその周辺を舞台にしたコマ撮りアニメーション作品を制作した。悪魔のしるしは、世界各地の建築物を舞台に「入らなさそうでギリギリ入るオブジェを搬入する」演劇/パフォーマンス作品「搬入プロジェクト #11 鳥取計画」を実施。滞在前半では、鳥取県のリサーチを行うと同時に岩美町及び琴浦町から資材を調達し、大学生を中心とした制作ボランティアとともに巨大なオブジェの制作をワークショップとして行った。2月24日のパフォーマンスでは、オブジェを参加者たちが担ぎ出し、路上を練り歩いたのち、1階部分から3階の窓を通して室内へと搬入した。

展覧会では、悪魔のしるしは、荒木悠によるパフォーマンスのドキュメント映像の上映と、オブジェや衣装を纏ったモデルたちの写真作品、マケット、ドローイング等による展示を行った。フジタマは、新作を含む映像作品5点を展示した。

また、展覧会期中に、悪魔のしるしの企画で「搬入プロジェクト #11 鳥取計画」の報告会がSTUDIO4（東京都品川区）で開催され、危口をはじめとするチームメンバーとダンサー・振付家の振子びじんによるディスカッションも行われた、

【関連企画】

危口統之（悪魔のしるし）アーティスト・トーク 2013.1.11 (金) 18:30

悪魔のしるし公開制作 2013.2.16 (土) - 23 (土) 10:00 - 16:00

悪魔のしるし「搬入プロジェクト #11 鳥取計画」パフォーマンス上演 2013.2.24 (日) 14:00 - 16:00

フジタマ アーティスト・トーク 2013.3.17 (日) 14:00 - 16:00





Leo Katunaric

レオ・カチュナリック

滞在期間 | 2013.11.06 (水) - 2013.12.15 (日)

クロアチアを拠点に演劇や美術を手掛けるレオ・カチュナリックは、インドをはじめとするアジア地域で展開してきた「Re-Death Project」を日本で展開させることを計画した。このプロジェクトは、社会的な大事件や災害によって個人のアイデンティティが変化したり、強制的に変化させられるという事実に着想を得ており「もう一つの可能な人生／人格／アイデンティティ」を創造するための装置として作られた架空のシステム「Re-Death Machine」を稼働させるものである。約5週間にわたって旧横田医院の建物をスタジオとして、鳥取市内各所や三徳山三佛寺を取材した。また被爆地である広島まで足を伸ばし、平和記念資料館ほか市内で撮影を行った。「あり得たかもしれない別の人生／人格／アイデンティティ」の創出をテーマに、最終的には9つの映像作品と2枚の絵画作品が完成した。映像には、鳥取大学学生を中心に募集したボランティアスタッフが参加し、映像作品への出演や演出・撮影の補助など作家とともに活動した。



Exhibition

「Constructing Re-Death Machine」

日時 | 2013.12.13 (金) - 2014.1.13 (月) 13:00 - 18:00

展示は9つのイメージとそれに基づく絵画のインスタレーションで構成されており、人々の現実の夢や願望を虚構の中に取り入れることで、今日の仮想世界に生きる私たちのアイデンティティや現実に対して新しいアプローチを試みたものである。個人のアイデンティティとは流動的であり、個人の夢や願望、または外部の社会的圧力によって変化するという概念がプロジェクトの中心にある。「Re-Death Machine」は比喩的に、人々がこれらの変化をどのように乗り越え、災害や社会的混乱に対応して代替的な人格を構築するのかを探求するものであった。

展示は1階から3階まで館内全域を会場とし、映像の舞台としても使用された建物を巡ることで物語が進行するような順路をとった。展覧会初日には作家と鳥取大学学生によるライブ・パフォーマンスが行われ、来場者もまた「Re-Death Machine」の一部として作品に参加するインタラクティブな要素の強いものであった。

[関連イベント]

オープニング・パフォーマンス 2013.12.13 (金) 18:00 - 20:00





mamoru

マモル

滞在期間 | 2014.1.4 (土) - 1.7 (火)
2014.3.2 (日) - 3.27 (木)

普段あまり気にとめない音を「聴くこと」から知り得る世界を提示してきたサウンド・アーティスト mamoru は、リサーチの折に土地の人から聞いた昭和 27 年の鳥取大火の話や、日常の会話で交わされる気象の話—中でも「風」についてのトピックが頻出していたことから、近年取り組んできた「風のスタディ」の一環として「大気—風」をテーマにした作品制作に取り掛かった。鳥取大学地域学部の学生数名とリサーチ・チームを結成し、鳥取近辺の風にもつわるトピックを集めるところからスタートした。湖山池で活動するヨット・サークルや、鳥取砂丘のパラグライダー・スクール、東郷池の白魚漁など、多岐にわたるジャンルにおける風についての知の蓄積を、現地へのフィールドワークや関係者へのインタビューを通じて調査した。また、1952 年に発生した鳥取大火が春の大風が原因の一つであったことから、その日の気象状況や経験者への聞き取り、当時の小学生たちの体験談をまとめた文集などの資料を調査した。

Live Performance

「風を知るための／幾つかのパフォーマンス」

日時 | 2014.3.22 (土) 15:00 - 16:00 3.23 (日) 15:00 - 16:00

Exhibition

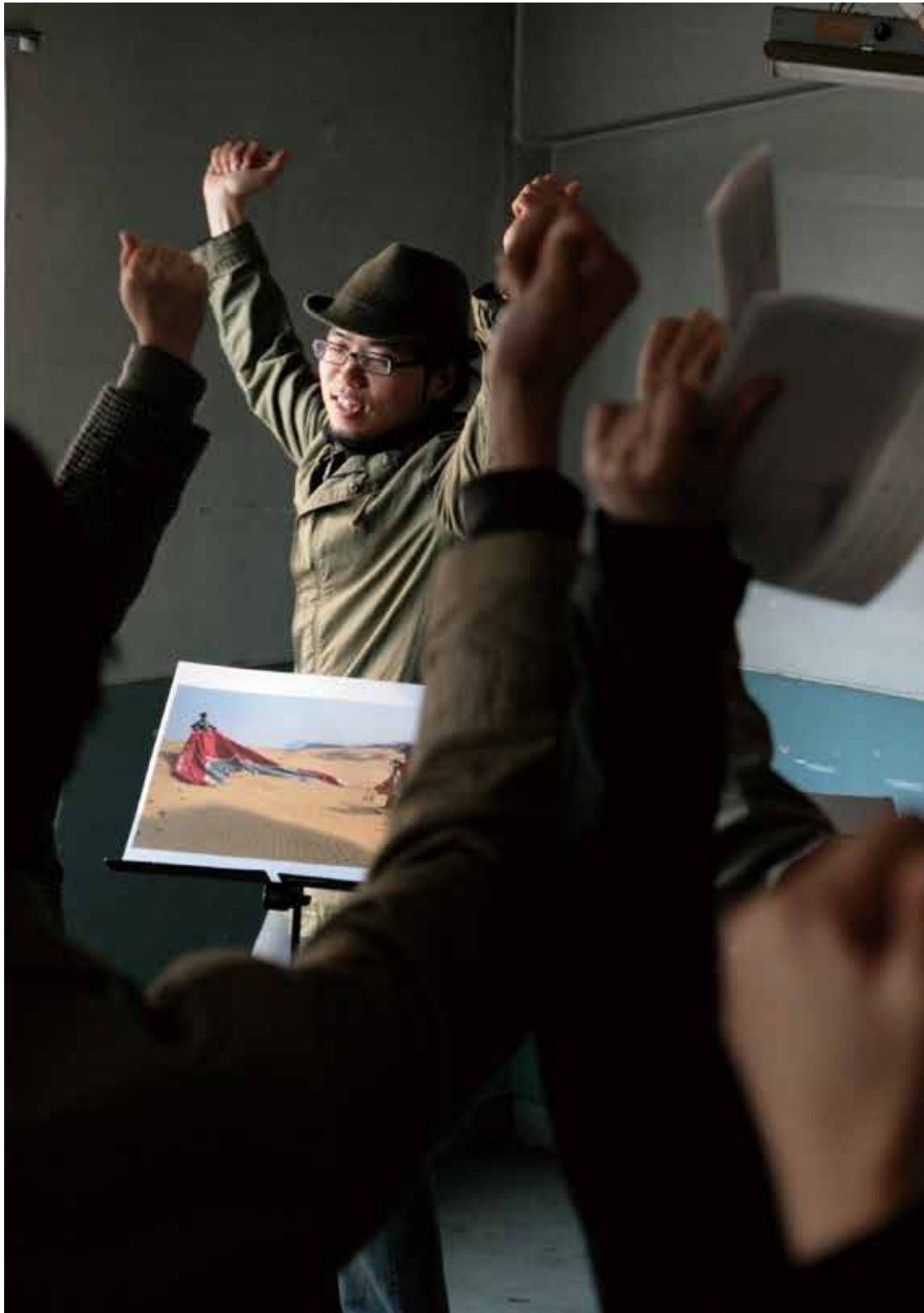
「風を知るための／幾つかのスコア」

日時 | 2014.3.27 (木) - 4.13 (日)

約 3 週間にわたる「風のスタディ」から、旧横田医院全館を使ったレクチャー・パフォーマンスが制作され、2 日間にわたって上演された。リサーチで出会った風をよく知る人々の話、そこから想像し紡いだ言葉が書かれたテキスト・スコア（楽譜）を元に、1 階の手術室をスタート地点として、2 階の大病室、3 階の居室を順に巡りながら鑑賞するツアー・パフォーマンスの形態で、部屋が移ると場面も変化していく。最後は屋上で実際に風を感じて終了した。mamoru がリサーチを通して経験した風の感覚が織り込まれたシアトリカルな作品となった。

パフォーマンス終了後、上演で使われた舞台装置とインストラクション、テキスト・スコアを再構成したものをインスタレーションとして展示、公開した。鑑賞者自身が map を見ながら会場をまわり、テキストを読み進めていくスタイルをとり、パフォーマンスの追体験でありつつも新たな鑑賞体験を提示した。





守章

Akira Mori

滞在期間 | 2014.11.6 - 12.20

さまざまなものの中にある「距離感」をテーマに作品を制作するアーティスト・ユニット守章は、東日本大震災以前から地域の防災無線の音を収集するプロジェクト「終日市町村」に各地で取り組んできた。約1ヶ月半にわたる滞在では、まずこのプロジェクトを鳥取県全域で行うことを計画、県内19市町村で音楽が再生される時間を確認し、その時刻をめぐって現地へ赴き録音した。

また、唱歌「ふるさと」で知られる作曲家・岡野貞一が鳥取市出身であることに着目し、岡野が作曲した日本の旧植民地の学校の校歌の調査を行った。わらべ館（公益財団法人鳥取童謡・おもちゃ館）の協力のもと校歌の楽譜を入手し、その音楽を口笛で再現することを試みた。口笛演奏家の口笛太郎氏による演奏の録音は、岡野貞一が幼少期に洗礼を受け、讃美歌やオルガンによって西洋音楽の素地を作った鳥取教会の会堂で行われた。

Exhibition

「近くて遠くて」

日時 | 2014.12.19 (金) - 2015.1.25 (日) 13:00 - 18:00 ※火～木は閉館

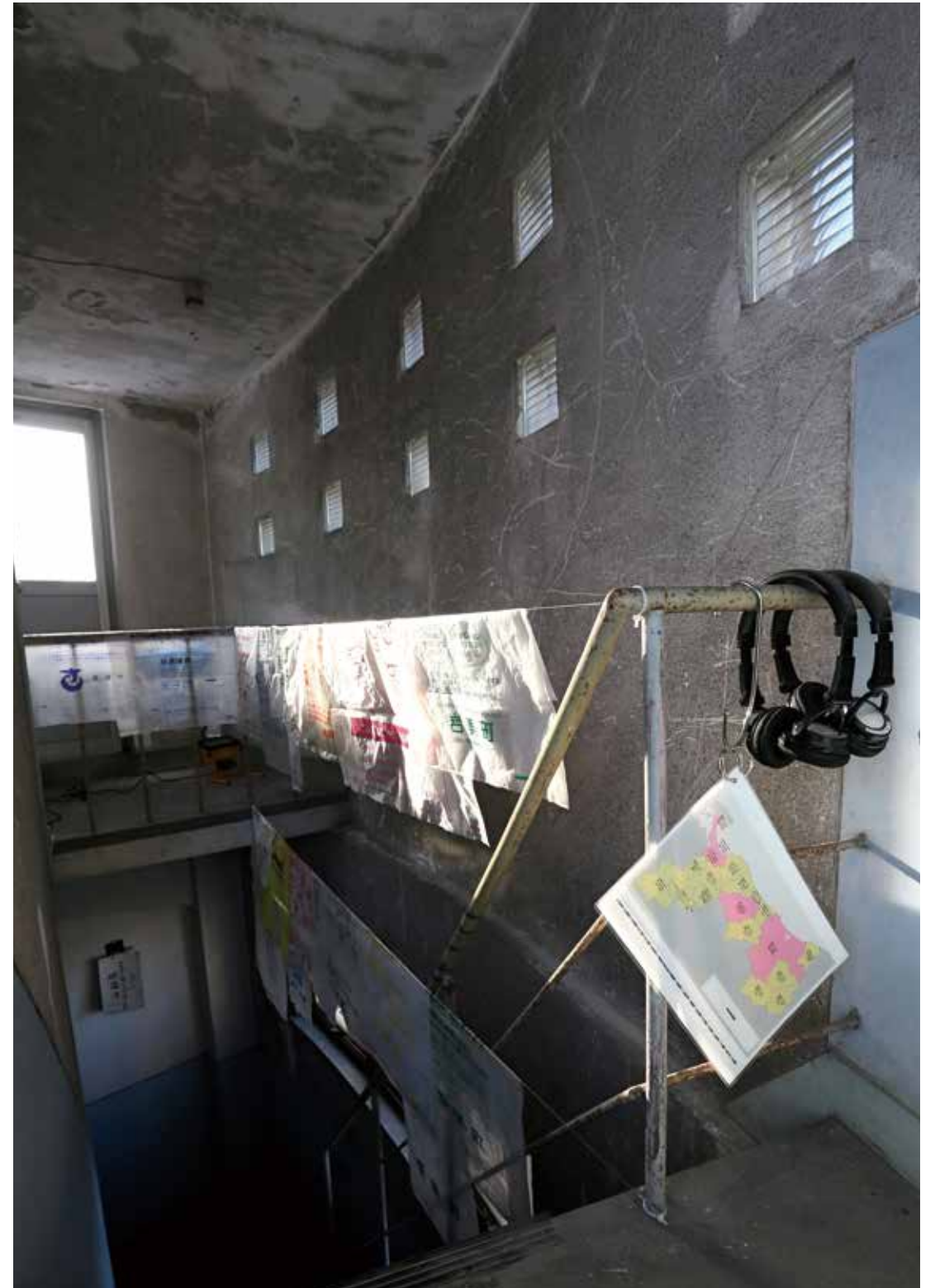
「近くて 遠くて」と題された本展では、滞在制作を通じて制作された2つの新作インスタレーションとして発表された。1階の玄関には、旧植民地に設置された学校の絵葉書、2階には、岡野貞一が手がけた旧植民地の校歌と唱歌「ふるさと」を口笛で演奏した録音音源を、旧横田医院の廊下に設置されていたスピーカーから流すサウンド・インスタレーション、また3階の一室には、校歌の楽譜のコピーと旧植民地の地図と、立体的な展示空間となった。屋上には「終日市町村・鳥取」として、ワイヤレス・イヤフォンを通じて19市町村の防災無線の音が、各市町村のゴミ袋とともに展示された。さらに鳥取大学サテライトキャンパスおよび本通商店街組合の協力を得て、本通ビルにも作品が設置された。

[関連イベント]

アーティスト・トーク：2014.11.14 (金) 19:00 - 21:00

オープンスタジオ：2014.11.22 (土) 13:00 - 18:00





坂口直也

Naoya Sakaguchi

滞在期間 | 2015.3.2 (月) - 4.26 (日)

移動可能な屋台「山車小屋台 (だしこやたい)」をその土地で見つけた廃材 (High-財) を用いて制作し、まちなかを牽き歩きまわりながら路上で屋台パフォーマンスを行う坂口直也の「シャッターガイ (シャッター街 / Shutter-Guy / シャッター外)」プロジェクトを、旧横田医院を拠点に鳥取市中心市街地に展開した。出会う素材、人々、場所、などの偶然性と各地域が持つ独自性が、作家と出会い、思いもよらないかたちで実現していくプロセスを重視する坂口は、滞在期間の前半には「山車小屋台」を公開制作した。その完成後、市街地に屋台をひいて移動し、シャッターが閉まっている店屋の店主と直接交渉の上、路上で商売 / パフォーマンスを実施した。

滞在期間中には、廃材を集めてつくったソリやサーフボードのような遊具で、砂丘や海でのフィールドワーク / プレイを行うワークショップを実施し、完成した遊具は連結、合体、増作し、一つの「山車小屋台」として完成させた。また、市内の商店街の店主の方々とプロジェクトの実現に向けたオープン・ミーティングを開催した。

Performance

「シャッターガイ (シャッター街 / Shutter-Guy / シャッター外) in 鳥取」

日時 | 2015.3.24 (火) - 3.31 (火) 10:00 - 16:00

Exhibition

「Archives of Shutter-Guy in Tottori」

日時 | 2015.4.24 (金) - 5.24 (日) 13:00 - 18:00

坂口が制作した「山車小屋台」と合わせて、公開制作やパフォーマンスの記録写真やドキュメント・ムービーを展示。また、ワークショップ「砂丘 de 化 Guy 活動」において参加者が廃材を使って制作した遊具と、実際に遊具を用いて砂丘の急斜面を滑り降りるドキュメント写真もあわせて紹介した。

[関連イベント]

公開制作 2015.3.4 (水) - 3.22 (日) 10:00 - 16:00

アーティストトーク 2015.3.7 (土) 18:30 - 20:30

ワークショップ 「砂丘 De 化 GUY 活動」 2015.3.14 (土)、3.15 (日) 10:00 - 16:00

オープンミーティング 「シャッターガイ・プロジェクト in 鳥取〜鳥取市内の8つの商店街との出会い」

2015.03.23 (月) 19:00 - 20:30 ※ SAKAE401 との共同企画





野村 誠 / やぶくみこ

Makoto Nomura, Kumiko Yabu

滞在期間 | 野村 誠：2015.11.17 - 11.24 2016.2.27 - 2.29 3.25 - 3.28
やぶくみこ：2015.11.17 - 24 12.12 - 12.15
2016.1.23 - 1.26 2.26 - 2.29 3.25 - 3.28

作曲家の野村誠と、作曲家／パーカッショニストのやぶくみこを招聘し、ワークショップ通じた市民参加型の楽曲制作を行った。野村は1チームを5人とし、それぞれが好きな楽器を持ち寄り、ひとりずつ順番に、即興で音を重ねていくオリジナルの共同作曲法「しよぎ作曲」のワークショップを6回開催。他方やぶは、「音を出し続ける」「音を出さずに周りの音を聴く」「聞こえた音に反応する」など単純なルールで音を出していく即興音楽のワークショップと、曲の始まり方のルール、終わり方のルールなど、音楽の大枠を決めていく共同作曲のワークショップを6日間にわたって開催した。ワークショップには、年齢、性別、楽器の経験の有無などを問わず、様々な個性を持った人々が集まり、出会うなかで音とリズムを作っていく、共同作曲や食事会を通じて交流を深めた。

Live Concert

「発酵する音楽」

日時 | 2016.3.27 (日) 14:30 - 17:00

成果発表として実施したライブ・コンサート「発酵する音楽」は、ワークショップを重ねることで、作曲家と市民とがゆっくりと、ともに音楽を育てていった意味を込めてタイトルが付けられた。このライブに際し、即興共同作曲ワークショップの参加者で「ホスピテイル楽団：ぼうしとめがね」が結成され、参加者らがこれまで作曲した音楽を元にふたりが書き下ろした新曲が演奏されることとなった。

公演の第一部は、旧横田医院を会場に建物内部を巡りながら上演された。その後観客は演奏者に導かれながら第二部の会場であるパレットとっとり市民ホールへ移動、楽団による演奏を鑑賞した。本公演のスペシャル・ゲストとして地歌箏曲家の竹澤悦子が特別出演し、箏とピアノのための協奏曲や三味線弾き語り、ガムランを交えたホスピテイルのための合奏曲など、バラエティに富んだ曲目が披露された。

【関連企画】

即興共同作曲ワークショップ

野村 誠：2015.11.17 (火) - 11.22 (日) 2.27 (土) 2.28 (日)

やぶくみこ：2015.11.21 (土) 11.22 (日) 12.13 (日) 12.14 (月) 2016.1.24 1.25 2.27 (土) 2.28 (日)

トークイベント「野村誠 | オーケストラの愉快な味わい方」 2015.11.19 (木) 19:00 - 21:00

トークセッション「野村誠+やぶくみこ」 2015.11.23 14:00 - 16:00





佐々 瞬

Shun Sasa

滞在期間 | 2015.11.23 (月) - 12.18 (金)

現実とフィクションを織り交ぜてありえたかもしれない過去やありえるかもしれない未来といった可能性の世界をテキスト、パフォーマンス、映像といった複数のメディアを使って描く佐々瞬は、約3週間に及ぶ滞在制作において、『暮しの手帖』を創刊した初代編集長・花森安治の戦中の大政翼賛会での活動と、戦後の思想転向への興味から、当時の雑誌の愛読者へのインタビューを通じ、花森の思想が読者たちの生活や営みにいかに息づき、影響を与えているかについてのリサーチに取り組んだ。

Exhibition

「手帖のある暮らし／旗の行方」

日時 | 2015.12.13 (日) - 2016.1.31 (日) 13:00 - 18:00 ※金～月のみ開館

「手帖のある暮らし／旗の行方」では、滞在制作で撮影した市民の方々のインタビュー映像と、軍服を着た戦時中の花森と、敗戦後に自律的なジャーナリズムと自律的な市民による日本の再建をめざして活動した花森の、両者を佐々が演じる映像作品が発表された。また、花森の戦後の活動を象徴する「一銭五厘の旗」を鳥取で集めた布地を縫って再現し、花森の著書の複写とともにインスタレーションとして展示した。戦後70年を迎える年に、戦争を経験した世代が遺そうと思ったもの、それを受け取りつつ戦争の影の下に高度経済成長期を過ごしたもの、そして戦後70年という時代を共有する今に生きるものとは何か、という問いが展覧会を通じて投げかけられた。

[関連イベント]

アーティスト・トーク 2015.11.27 (金) 19:00 - 21:00

オープンスタジオ 2015.12.5 (土) 13:00 - 18:00

ワークショップ「自分たちの『暮しの手帖』をつくる」 2016.1.17 14:00 - 18:00





竹川宣彰

Nobuyuki Takekawa

滞在期間 | 2016.3.1 (火) - 3.11 (金)
2016.3.20 (土) - 3.31 (木)

現代社会に対する批評的視点から歴史を再検証しつつも大らかでユーモラスな作品を制作してきた竹川宣彰を招聘し、約3週間にわたる滞在制作を実施した。前半の滞在では鳥取市内を散策しながら街中で見つけた彫刻作品や看板、オブジェなどをきっかけに、作品の構想を広げていった。円筒形の旧横田医院の造形から建物を「宇宙ステーション」に見立て、館内にパラレルワールドを展開させる展示プランが提案された。滞在の後半では、取材に基づいた絵画及びインスタレーション作品を制作した。

Exhibition

「宇宙船のバックミラー」

日時 | 2016.3.31 (木) ~ 2016.5.15 (日) 13:00-18:00 ※火水木は休館、祝日は開館

戦後の経済優先の発展主義的思想のアレゴリーとして「宇宙」というテーマを設定した竹川は、過去の戦争や現代の歴史認識の迷走を、満州国宇宙ステーションというパラレルワールドから眺めてみる、という設定で展覧会を構成した。鳥取の街中を探索して見つけた「惑星」たち—高度経済成長社会が見た夢の痕跡とそこでサヴァイヴしている小さな灯火—を紹介することで、進歩主義の象徴のような宇宙開発に民主主義や平和への人類の新たな挑戦をオーバーラップさせながら、現代を生きる我々が置かれた状況を浮かび上がらせた。展覧会期中の関連イベントとして、展覧会初日に作家によるアーティスト・トークを行ったほか、詩人・俳優の渋谷燈と竹川宣彰によるクロストーク「デモ#テロ」を開催し、活動、未来の社会などについてフリートークを行った。

[関連イベント]

アーティストトーク 2016.3.5 19:00 - 21:00

アーティストによるギャラリートーク 2016.3.31 (木) 19:00 - 20:00

クロストーク 渋谷燈×竹川宣彰「デモ#テロ」 2016.4.5 (火) 19:00 - 20:00





狩野哲郎

Tetsuro Kano

滞在期間 | 2017.7.9 (日) - 7.30 (日)

ホスピタリティのコンセプトのひとつである「他者との関わり」をテーマに作品を制作する狩野哲郎を招聘。その地名の由来とも言われる「鳥取部 (とりべ・とりべ)」の伝説を起点に、その歴史の変遷やこの土地に棲息する鳥の生態について、鳥獣保護区等位置図に基づいた実地調査、鳥の生息する場所や狩場へのフィールドワーク、現場に関わる人々へのインタビュー等鳥取県内各地でリサーチを行った。

Exhibition

「既知の地、未知の道」

日時 | 2017.7.29 (土) - 9.11 (月) 13:00 - 18:00 ※金土日および祝日開館

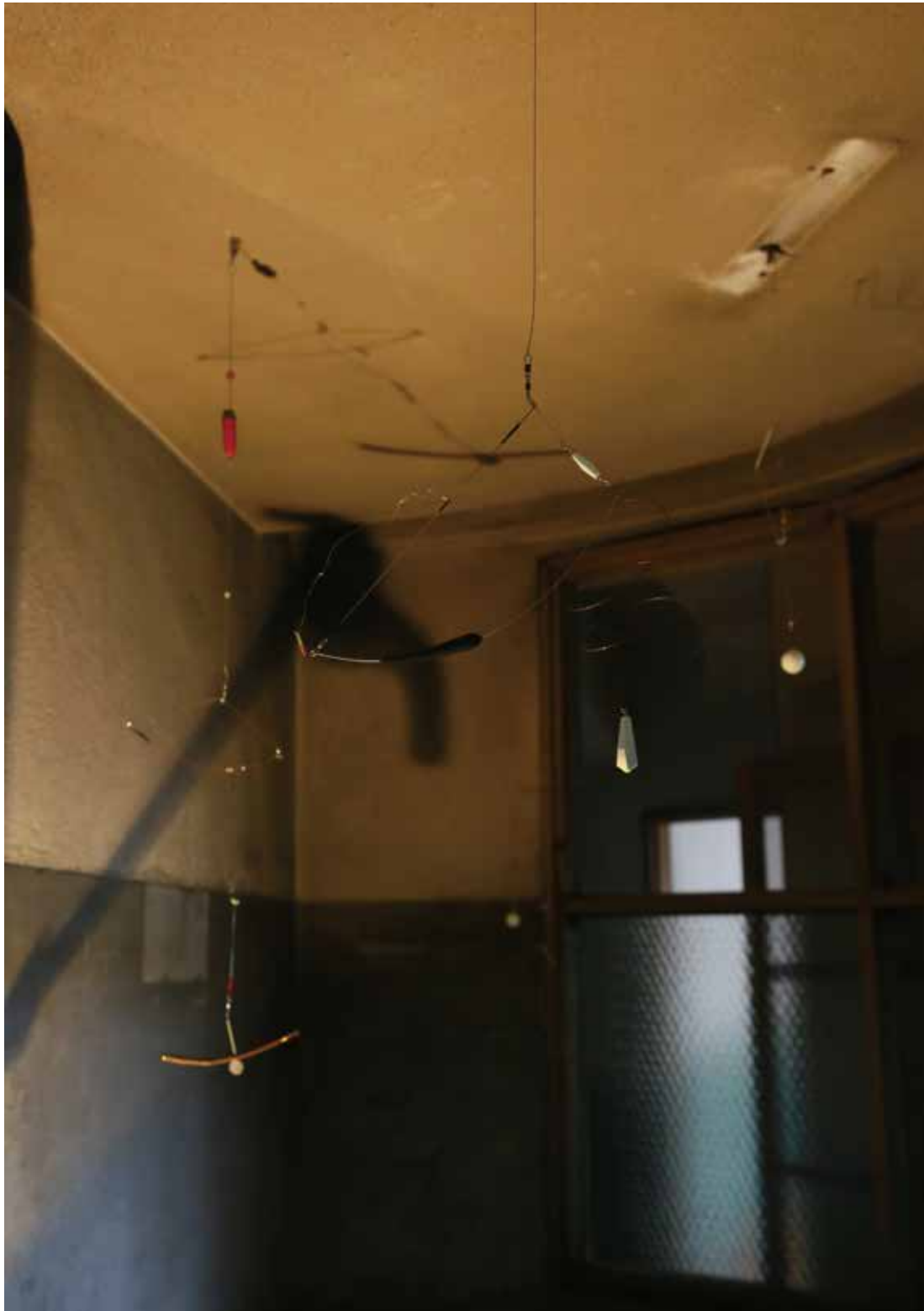
展覧会「既知の地、未知の道」では、近年狩野が取り組んできた、人間の生活に身近でありながら別の体系を生きる存在としての「鳥」の視点を取り入れたインスタレーション作品を新たに制作、発表した。日用品や自然物といった身の回りのものを組み合わせ、配置されたオブジェたちは、「鳥」という他者の知覚に開かれることによって、彫刻や絵画といった既存の美術作品の別のありようとその可能性を提示する。本展では、鳥取部をめぐる説話の鍵を握る渡り鳥が通っていた道、見ていた土地の姿を想像することを通じて、現代を生きる我々、それを取り巻く環境・社会に新たな光を当てることを試みた。

展覧会初日には、アーティスト・トークを実施し、作家本人による作品解説を行った。

[関連イベント]

アーティスト・トーク 2017.7.29 (土) 17:00 - 18:00





山下 残

Zan Yamashita

滞在期間 | 2018.8.10 (金) - 9.23 (日)

山下残は、彼の10年来の友人であるマレーシア出身のアーティストであるファミリー・ファジールの国政選挙運動に同行した体験を、毎日つけていた日記や撮影した映像、写真などの記録を頼りに振り返り、新たなリサーチを重ねて作品化することを試みた。滞在期間中には、本プロジェクトの説明会を開催したほか、社会学者やアーティスト、政治家など様々な分野の専門家とのパブリック・トークを実施し、政治と芸術の関係のみならず、広い角度から思索を深め創作活動にあたった。

Performance

山下 残 パフォーマンス「GE14」

日時 | 2018.9.16 (土) 19:00 9.17 (日) 15:00 9.21 (金) 19:00 9.22 (土) 15:00

2018年5月9日、マレーシアの第14回総選挙 (General Election = GE14) は、1957年の英国からの独立以来初の政権交代をこの国にもたらした。この取材をベースにした舞台作品「GE14」は、旧横田医院を会場に全4回上演された。

助成：公益財団法人セゾン文化財団

[関連イベント]

「GE14」プロジェクト説明会 8.11 (土) 14:00 - プロジェクトスペースことめや

パブリック・トーク

- 01 「表現としての選挙」ゲスト：渡邊太 (社会学) 8.12 (日) 19:00 - 旧横田医院
- 02 ゲスト：家中茂 (環境社会学) 8.13 (月) 19:00 - プロジェクトスペースことめや
- 03 ゲスト：竹内潔 (文化政策論) 8.23 (木) 19:00 - トウフビル 3F Bar スペース
- 04 ゲスト：渋谷橙 (詩人・俳優) 8.26 (日) 14:00 - 旧横田医院
- 05 ゲスト：福住英行 (日本共産党鳥取県常任委員) 8.29 (水) 19:00 - トウフビル 3F Bar スペース
- 06 ゲスト：中森圭二郎 (映画監督) 9.1 (土) 14:00 - 旧横田医院
- 07 ゲスト：木野彩子 (振付家) 9.2 (日) 14:00 - 旧横田医院
- 08 ゲスト：藤原勇輝 (彫刻家) 9.5 (水) 19:00 - 旧横田医院
- 09 ゲスト：野田邦弘 (創造都市論) 9.8 (土) 14:00 - 旧横田医院





地主麻衣子

Maiko Jinushi

滞在期間 | 2019.3.4 (木) - 3.14 (木)
2020.8.1 (土) - 8.31 (日)

本プログラムは、2019年のリサーチ期間を経て構想された作品を、2020年8月に約1ヶ月かけて制作し、10月からの展覧会としてまとめあげるという長期にわたるものとなった。鳥取砂丘をイメージソースとした新作のプランは、風によって常に変化する砂の形状を「記憶の儚さ」に重ね合わせた一種の映像詩のようなものであったが、砂地へのロケハンや鳥取大学乾燥地研究所など更なるリサーチを重ね、2度目の滞在期間中にも展開していった。地主自身が映像撮影を手がけたほか、音響・録音にはやぶくみこ、オブジェ等の製作には高石晃、スチル写真撮影には田中良子による協力があり、各分野の専門家とのコラボレーションは作家にとっては新たな試みであった。

Exhibition

「ブレイン・シンフォニー」

日時 | 2020.10.24 (土) - 12.13 (日) 13:00 - 18:00 ※火水木は休館

成果発表展として開催された「ブレイン・シンフォニー」は、コロナ禍の生活における記憶の曖昧さや認知症が進行する祖母との会話など作家の個人的な経験や、歴史の忘却といった社会的な風潮への意識から記憶の移ろいやすさがテーマとして据えられた。展示は鳥取砂丘や鳴石の浜、風力発電所など、鳥取の風景を舞台にした映像をメインに、写真や音声といった多様なメディアを駆使したインスタレーションとして構成され、会場の各部屋に配置された作品のイメージや音が呼応したり、重なり合ったりする様子を地主は「交響曲」になぞらえた。記憶を司る「脳」のイメージは、ニューロンに流れるインパルス、記録メディアのデジタル信号の波形、風や太陽光といったエネルギーの循環と様々に展開し、あらゆる事象が連関する宇宙全体にまで広がっていく。新たな世界の認識の方法を提示する、繊細で詩的な空間となった。

[関連イベント]

アーティスト・トーク 2019.3.8 (金) 19:00 - 21:00

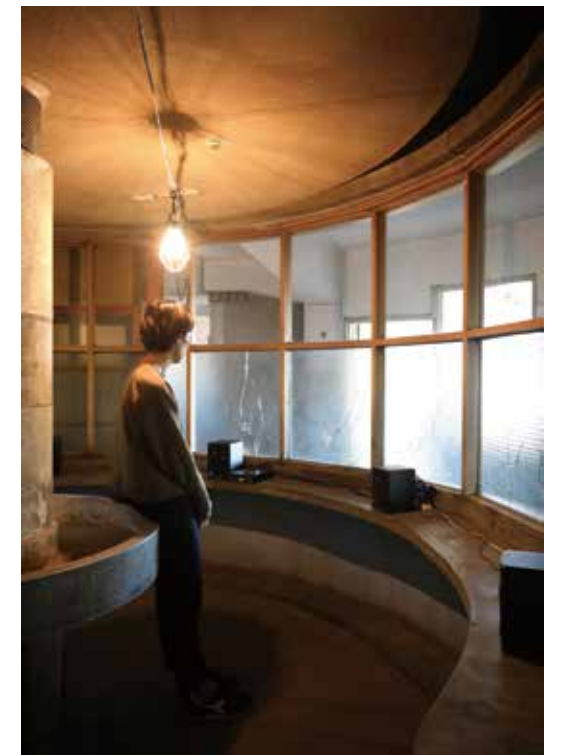
オンライン・サロン・トーク「地主麻衣子・高石晃 | アーティストからみた各国のレジデンス事情」

2020.8.8 (土) 20:00 - 22:00 ことめや ※ youtube にてオンライン配信

ギャラリートーク 2020.10.24 (土) 16:00 - 17:00

ライブ・パフォーマンス 2020.10.24 (土) 17:00 - 17:30 出演: やぶくみこ (ガムラン演奏)、にやろめけりー (音楽・歌)





Pil and Galia Kollektiv

ピル&ガリア・コレクティヴ

滞在期間 | 2019.7.12 (金) - 7.21 (日)

ロンドンを拠点に活動する中西美穂をゲスト・キュレーターに迎えた実施した本プログラムでは、モダニズムと後期資本主義の問題を提示する作品を手掛けてきたピル&ガリア・コレクティヴを招聘。初めての日本での制作となる今回、第二次大戦後の日本におけるモダニズムのあり方への興味から、1950年代の前衛アート集団「実験工房」が伝統文化の再解釈を行っていた点に注目し、彼らが舞台《月に憑かれたピエロ》で行なった「能役者とのコラボレーション」という要素や、幾何学的な抽象造形による舞台装置を新作に盛り込んだ。また、1970年の大阪万博がテクノロジーの発展によるユートピア思想に基づき、国家権力と商品に囲まれた未来像を象徴していたことに興味を覚え、前衛芸術家集団 E.A.T. が手がけた「ペプシ館」のミラーと霧で包まれたパヴィリオンの要素を制作に取り入れた。鳥取での滞在制作に先駆け、実際に大阪の万博記念公園でロケを行い、その後鳥取にて映像作品の編集およびパフォーマンス作品の執筆・制作と舞台美術の制作に取り組んだ。

Live Performance 「亡霊パヴィリオンのみやげ」

日時 | 2019.7.19 (金) 18:30 - 19:00

Exhibition 「(不)可視のプロパガンダ」

日時 | 2019.7.19 (金) - 8.6 (火)

展覧会「(In)visible Propaganda | (不)可視のプロパガンダ」では、上記の映像を含む新作インスタレーションとパフォーマンス「亡霊パヴィリオンのみやげ」が展示・上演された。パフォーマンスでは、能をベースとしたパフォーマーである篠田葉が参加し、かつてペプシ館で働いていた女性の亡霊を演じた。展覧会では、この舞台の美術・装置によるインスタレーションにパフォーマンスの記録映像および舞台衣装を加えたものを展示したほか、過去に制作した6作品の映像によるインスタレーションを建物全体に配置し、約15年間のキャリアにおける一貫したテーマとDIY精神を基調とした表現方法を、ビデオとパフォーマンスの記録映像により紹介した。

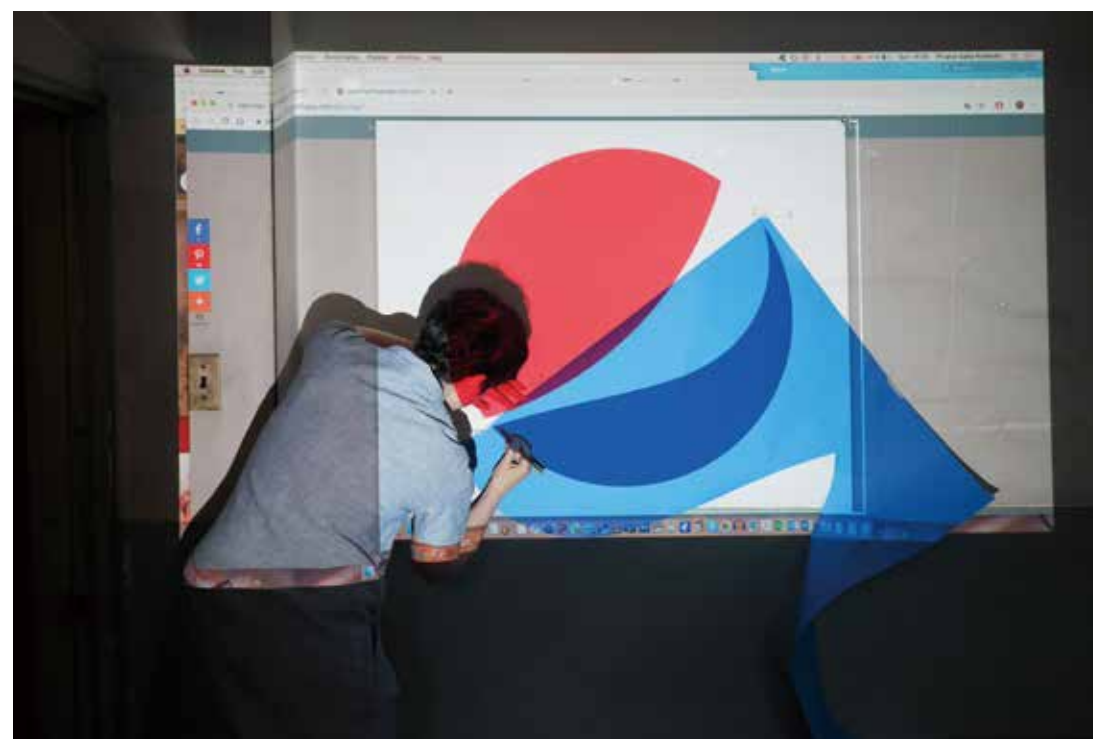
制作：ピル&ガリア・コレクティヴ、パフォーマンス：篠田葉

助成：大和日英基金、グレイトブリテン・ササカワ財団、ロンドン・メトロポリタン大学、文化庁

[関連イベント]

アーティストトーク 2019.7.13 (土) 14:00 - 15:30

アフター・トーク 2019.7.19 (金) 19:30 -





白川昌生

Yoshio Shirakawa

滞在期間 | 2022.8.7 Sun. – 8.18 Thu.

白川昌生は「はじめてのアート・プロジェクトトークシリーズ」の第6回目の講師としてレクチャーを開催した2014年以来、スクール・イン・プログレスの特別講師を4回務めるなど折に触れ本プロジェクトへの参加を依頼していた。2022年度は作品制作のためのリサーチとして12日間滞在し、山陰地区への大本教の伝播の様子や出雲信仰に関する資料調査、鳥取県にゆかりのある近代史上の人物たちの活動や思想についての文献調査に取り組んだ。滞在期間中の交流プログラムとして、洞窟絵画から現代アートまで、スピリチュアリティという視点からのリサーチについてお話を伺うトークイベントを実施した。

なお、白川のリサーチは2023年度にAIR475のレジデンス・プログラムで継続され、その成果は2024年8月の米子市美術館での個展「出雲神話はアートになる」において、12点の平面作品として発表された。今後もリサーチは継続され、最終的にはHOSPITALEでの成果発表が予定されている。

[関連イベント]

トーク&シェアリング「アートとスピリチュアリティ：原始美術からボイスまで」

2022.8.10 (水) 19:00 – 21:00 8.15 (月) 19:00 – 21:00



Boat ZHANG

張 小船 (ポート・チャン)

滞在期間 | 2023.3.16 (木) - 3.27 (月)
2023.9.11 (日) - 9.26 (火)

2023年3月にリサーチ・レジデンスに参加した張 小船 (ポート・チャン) は、故郷の上海近郊の街を彷彿とさせる鳥取の風景の中で時間を過ごし、そこに暮らす人々との交流を通じて、自らの生活と制作を振り返り、もう一つ別の可能性としての世界のあり方を感じ取った。約半年間の東京での構想期間を経て、かつて病院として機能していた旧横田医院の場所に焦点を当て、コロナ禍に覆われていた社会状況を背景に「病と治療」をテーマにした新作を制作した。9月の2度目の滞在時には、東京で撮影・制作した映像作品をベースに、追加撮影や立体物の制作を行い、1階から屋上まで全館を存分に使ったインスタレーション作品を制作した。

Exhibition

「そうぞう力 なくなった!?!」

日時 | 2023.9.24 (日) - 1.5 (日) 13:00-18:00 ※火～金は休館

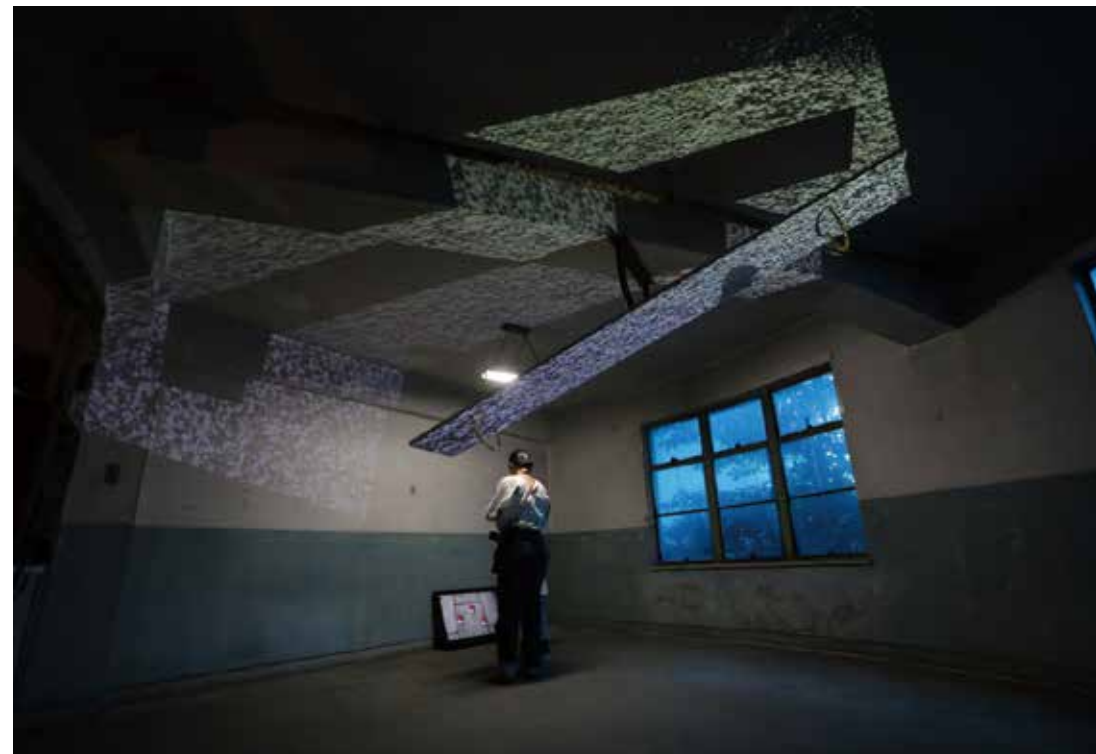
日常の些細な感情や違和感を礎に、無意識のうちに取り込まれてしまっている社会のルールや価値観に疑問を投げかけ、シンプルかつコンセプトualな手法で解決策を探ろうとする作品を手掛けてきたポート・チャンは、インターネットとその情報の網に覆われてしまった現代人が、スマートフォンを手放さないことで便利で快適な生活を手にした一方、常に不安に駆られている様を「症状」に例え、商品や時間を消費するだけでなく、人間関係や大切な記憶を消費し、さらには人生やアート/文化さえも消費の対象となってしまったある種のディストピアとも言える現代の社会や生活を鋭く批評する。タイトルの「そうぞう力、なくなった!?!」とは、作家自身から発せられた不安や怖れであると同時に、全ての人々に投げられた問いでもある。全館を使った展覧会は、1階の玄関ホールに置かれた赤い飴の山と青い飴の山から始まる。現実の世界に目覚めるか、バーチャル世界に留まるかという映画『マトリックス』の二択が来場者にまず迫られるのである。2階の元病室には、スマホ中毒やコンビニ食といった馴染みのライフスタイルや社会の有り様から見えてくる病的な現実が、さまざまな「症例」として提示され、3階と屋上には、そうした現代人の病に向き合い治療するための、馬鹿馬鹿しくもドキキとする「処方箋」が様々なガジェットや装置として提案された。

展覧会初日には、作家によるアーティスト・トークおよび屋上での日光浴を体験するパフォーマンス/ワークショップを実施した。

[関連イベント]

アーティスト・トーク 2023.3.17 (金) 19:00 - 21:00

オープニング・トーク & パフォーマンス 2023.9.24 (日) 15:00 - 16:00







はじめてのアート・プロジェクト トークシリーズ

Lecture Series

キュレーターやアーティスト、コーディネーター、ジャーナリスト、アーティストなど国内外のアートの現場で活動する方々をゲストに迎え、それぞれの実践についてお話を伺うレクチャープログラム。

アートを治癒するための『ホスピテイル』プロジェクト

小泉元宏 芸術社会学

殿堂を出る

鳥取市の中心市街地に位置する旧・横田医院の建物を拠点として展開してきたアートプロジェクト^[1]、「ホスピテイル」が提示するのは、「高いところから人々に恵みを与える」のではなく、私たちの日常に分け入り、それが全く異なる色のフィルターを通して見えてくるような気づきをもたらすアートである。情報に溢れ、見せ物化^{スベクタブル}した社会のなかで、「自らが見たい世界」を見せられ続ける私たちにとって、それは一見すると理解しにくい活動かもしれない^[2]。それでもアートは日常のありふれた状況と、その前提に介入し、見過ごされがちな人々の物語や社会的課題をさまざまな方法で浮かび上がらせることができることをホスピテイルは示している。

このようなホスピテイルの活動は、現代のアート界がはらむ問題に正面から取り組むアート実践でもある。イラクからヨーロッパに逃れたクルド人のアーティストであるヒワ・Kは、自戒も込めながら「アートがやっていることは、甘すぎる」という^[3]。アートは難民たちに「あなたのストーリーを話さない」と言い、彼らに「難民」のスタンプを押しているだけだ、と非難しながら、アートは社会がはらむ問題に真に介入できていない、というのだ。「アートは、失敗している」と述べる、

難民当事者でもあるヒワ・Kの苦言は重い意味を持っている。実際のところ現代のアート界は、投資のための金塊の代わりとなるだけでなく、自らの地位を確立していく一部のスター・キュレーターやスター・アーティストのための道具となっている。彼らは、(他の)アーティストという猛獣たちを飼い慣らし、^{ミュージアム/ホール}「殿堂」で見せ物を催して、社会問題を考えるフリをした。有閑階級のためのサーカス団を組織し続けてきた。閉じられた安全なテントの中で難民問題や環境問題、紛争、社会的不平等……などの社会問題を糾弾し、それらを理解できる上客を迎える一方で、実際に人々の日常に入り込んでいくことはほとんどない。その社会正義のポーズの^ポ上流階級ふうな態度はもはや多くの大衆の嘲笑の的となっているにもかかわらず、孤独な道化の演技を続けるようすはまさしくピエロのようである。我々がいま本当にアートが活着している技術だと主張し、その意義を信じるのであれば、その価値が階級と資本に結びついた制度の網目に閉じて決定されていく狭い世界から抜け出すことを真剣に考えなくてはならない。

ディレクターの赤井あずみがホスピテイルの活動のきっかけとして語っている次のような話は、現代社会におけるアート状況と活動の必要性の前提を象徴的に示している。もともと

博物館のプログラムとして行う予定だった美術家・きむらとしろうじんじんによるアート活動、「野点」の予算が、あるとき切られてしまった。人々が絵付けした茶器を野外で焼き、茶を立て、飲み交わす……という、きむらの「町なか」での活動は、「博物館の仕事ではない」と予算を管轄する財政課から言われてしまったというのだ^[4]。このような既存の文化施設の常識が突きつけられる出来事が、ミュージアム学芸員も務めてきた赤井がミュージアムの外部でホスピテイルを展開する契機となっているのだという。この話からは、一義的には芸術文化の公共性に対する理解が乏しい日本の現状が突きつけられるが、同時に、アートの社会からの切り離しという、現在の文化をめぐる社会的制度・構造の問題も浮き彫りになる。もちろん国内外問わず、一部のミュージアムでは「まちなか」のアートが社会教育プログラムなどのなかで手掛けられることもある。だが、そのような活動の展開は限定的であるうえ、取りあげるミュージアムであっても、多くの場合それらはあくまで周縁的な位置付けに置かれている。このようなアート界の閉鎖性の構造と、それが生み出す態度のなかで「失敗」を重ね、いわば病気を得てしまったとも言えるアートを、社会生活に慣らし治癒するための意志と実践に立脚したところに、ホスピテイルのアートは展開しているのだ。

多様性にひらく

ホスピテイルプロジェクトの目的を、ディレクター赤井あずみは次のように示している。「空き家だったこの建物を活用し、人々の創造性を高め、多様な価値観を認め合うコミュニティの核となること」^[5]。そのために現代のまれびと(客人/異人)としてのアーティストを迎え入れるとともに、逆にアーティストがアートを通じて地域の人々を迎え入れる「館」となることを願って、ホスピテイルは名付けられた。そのプロジェクトが求めているのは、人々がアーティストを迎え入れアートの常識を変えていくだけでなく、アーティストが持ち込む多様な表現や活動を通じて、人々の価値観を多様化することでもある。

2000年代後半から、YouTubeやニコニコ動画等の動画共有サイトが増加して「参加型文化」^[6]が著しく活性化し、2010年代以降にはInstagramが新たな大衆の美学を生み出した現代社会においては^[7]、かつてないほどアンディ・ウォーホルが述べる「15分間の名声 15 minutes of fame」の世界、つまり人々が主観を広く解放させることを可能とする、民主的な実践のための社会が実現したかのようにみえる。だが市民知や集合知の行き過ぎた過大視の問題は——表面的に「市民の声を聞くこと」で民主主義を実現したと思



込もうとする政策の危険性と同様に——人々の声の一部の者たちの言葉によって操作されたり、聞こえの良い意見に流れたりしやすいという、ポピュリズムが時にはらんでしまう脆弱性を見過しがちな点にある。情報学者の西垣通は、正解が存在し、それを多数の人々が推測するような問題に対しては集合知が有効性を発揮する可能性が高いが、正解がなく人々の意見や価値観が対立するような問題を扱う場合には、いまだその有効性は不確かだという^[8]。現代社会の複雑化した諸問題の多くは、後者のような、明確な正解が存在しない問いであることはいままでもない。このような正解がない問題を扱う場合には、多数決ではなく、多様な意見や価値観を持つ人々が相互討論を通じて妥協できる合意点を見つけしていく努力が肝心だろう、と西垣は述べている。こうしたなかでアートの領域は、少数者の意見を含んだ多様な意見や価値観をもたらすことで、人々に判断の前提となる考えや物事の見方を示すための有力な方法となりうるはずだ。既存のスタイルや考えの模倣よりも、新たな創造や異質な物事を重んじ人々の情動に揺さぶりをかける前衛以来のアートの文化的特徴が、人々の判断の前提となりがちな支配的な見方とは異なる視座を提示し、人々に多様な価値観をもとにした

討議と合意のための場をもたらすことに結びつくためである。ホスピテイルは、「誰もがアーティスト」^[9]となりうる現代社会で、このような多様性にひらかれた社会像の可能性を、アートを通じて人々に提示し続けてきた。

ホスピテイルの多様性への指向についての認識は、実際に私自身がプロジェクトに関わって感じてきた出来事とも結びついている。ホスピテイルの活動には、滞在制作を通じた作品展示やイベント、地域の記憶や歴史にまつわるプロジェクト「すみおれアーカイヴス」、庭づくりのプロジェクトなどのほかに、「はじめてのアート・プロジェクト」シリーズというものがある。このシリーズは、「アートプロジェクトについて知らないな」と思った赤井が、「せっかくならほかの人も一緒に学ぶ場にしちゃえ」と、キュレーターやアーティスト、ジャーナリストなど国内外のゲストを迎えて人々とともに話を聞くレクチャープログラムであり、社会的事象と密接に関わる共創的芸術活動としてのアートプロジェクトが抱える課題や未来のあり方について考える場として2012年に開始された。私は2012年から2016年までホスピテイルプロジェクトの立ち上げや運営に直接関わったり、後にゲストとして同シリーズで話したりしたことがある。一連の関わりのなかで私が気づいたのは、こ



のシリーズが重んじるのは、アートプロジェクトについてわかりやすく示そうとする話よりも、より先鋭的な、あるいは小さな取り組みであっても個性的な話が展開できるか、という点にあることだ。一般的な知識をもたらすトークは、文化施設や市民講座で話すのには向いているだろうし、他の芸術祭やアートプロジェクトでは、ある種の「模倣」のための参考としての意味があるかもしれないが、ホスピテイルで話すためには本当に妥当なものではない。問題なのは、平易でわかりやすい話が展開することでトーク内容や事例が模範と化してしまうことにあり、その仕事は「^{ミュージアム/ホール} 殿 堂」での展示や上演から遠ざかろうとして、再び啓蒙主義的な態度に戻ってしまうことにつながるものである。そうではなくホスピテイルというアートプロジェクトが強く求めていることは、「自分たちの手で生活、社会をつくり上げていく」ために、多様な価値観を（赤井やアーティストらも含む）人々が持つこと、つまり人々が主体的に選択するための前提となる可能性を提示するところにあるのだ。この人々を無批判に信頼するのではない、しかし可能性を信頼する態度は、ホスピテイルの他のプログラムや、「スクール・イン・プログレス」(mamoru、山本高之、白川昌生らによるオルタナティブなアート学校を開くプログラム)などの共催プログラムにも深く共通するものだ。

期待される地域を超える

ホスピテイルはまた、限られた地域への利益を前提とした

アートプロジェクトではなく、人々が広く社会や世界との関係を結ぶためのプロジェクトでもある。2000年代以降、アートプロジェクトが地域社会で芸術祭などの場を通じて拡大するようになるにつれて、観光誘引や地域活性化におけるアートの有用性への着目が進み、政策におけるアートへの期待は著しく高まるようになった。とりわけ地域の景色や文化資源とアートの融合によって特徴的な地域性を表出し、多くの国内外からの観光客誘引に成功した「瀬戸内国際芸術祭」などの大規模な芸術祭は広く注目を集めてきた。いまや地域のブランディング、そして産業振興の獲得の有力な方法として、アートは経済政策の場においてもたびたび言及されるようになってきている^[10]。こうしたなかで各地のアートプロジェクトでは、どれだけ観光客数増に寄与し、いかに経済波及効果などによって地域への直接的な貢献を図ることができるかが、助成を得たり、開催のために関係者を説得したりするために、もはや無視できない明示的・黙示的な基準となっている。

このような芸術の観光・経済的価値への転換の重点化は、一方においてアートへの投資やアートファンの拡大を促す面もあるが、他方において選択された一部のアート、あるいはアートという名のエンターテインメントが各国家や都市、地域に広がる危険性を併せ持つ。アートだからこそ生み出している新たな価値のための挑戦や逸脱が、経済的・政治的な利益に結びつくかどうかという観点や、地域の人々の慣習的・道徳的な認識から問題として認識され、拒絶されてしまうからだ。ここでは、人々にとってわかりやすく興味を引くようなアートを用いることや、どれだけ多くの（しかし実際には声を上げ関与できる一部の）人々の期待に応えることができるかどうかが重んじられていく。ファシズムの台頭と文化政策によるコントロー

ルや排除の時代の後を生きる私たちは、アートが持つ力がいかなる方向に向けられているのかに十分に注意を払う必要があることは明らかなはずだ。それにもかかわらず、アート活動をめぐる社会的諸主体の狙いや、それらとの関わりをめぐる問題について真剣に考えようとすることは少ない。

さらに問題なのが、いまや地域の観光振興や経済活性化の定型の一つのように捉えられているアートプロジェクトにおいて、「地域内」の人々と「地域外」の人々が分けられ、人々に特定の「役割」が押し付けられてしまうことだ。観光社会学者のジョン・アーリは、観光は地域外の人々が求める姿を地域内の人々に強いる権力を内在することを論じている。彼はミシェル・フーコーの「まなざし」論を援用しながら、観光地を訪れる「外」の人々の視座（例えば前近代の「未開の自然」を求め、景色や風景、街並みなどを見ようとする視線）が存在すること、さらに、その視座に合わせて地域「内」の人々が自らの地域を「期待される」方向へと意識的・無意識的に意味づけしてしまうことを指摘する^[11]。すなわち、地域（観光地）の人々が他者に望まれる姿を自ら進んで「演じていく」ようになることを問題視するのだ。この批判が示す観光におけるまなざしをめぐるとの問題は、まさしく現在の大規模芸術祭や、そこで展開するアートプロジェクトをめぐるとの問題の核心を示している。地域社会における大規模なアートイベントは、景色や風景、街並み、そして「田舎のおじいちゃん、おばあちゃん的笑顔」といった地域外の人々が求める地域像へのまなざしに応えるため、アートを活用して新たな開発を進めつつ、恭順なおもてなしを自ら「演じられる」地域・地域住民像をつくり上げることで成立するのだから。このような「観光のまなざし」による地域の改変は、当該地域の社会的・文化的

複雑性を規律化・画一化し、地域の文化的・社会的多様性を削ぐ結果を生み出しかねない。そして観光客の誘引数や経済的価値の創出といった指標は、そのような主体と客体の関係性を強化してしまう。もちろん急いで補足を加える必要があるのは、芸術祭やアートプロジェクトの枠組みのなかでも、このような期待されるまなざしを避け、地域内外の人々が安易に二項対立的な関係性に陥ることがないような実践を進めようとするアーティストたちも存在していることだ。しかし、そのような対抗的な実践を行う場合であっても、過度な社会的目的に合わせた方向づけとディレクションのなかでは、そもそも芸術祭において選出されにくいのに加え、表現の可能性が限定されたり、人々との共創的關係構築の可能性が大きく狭められたりしてしまう危険があるだろう。

一方でホスピテイルがどうかといえば、プロジェクトが「鳥取」という特定の地名を冠することがないことに象徴的に示されるように（驚くべきことに、これはアートプロジェクトではかなり珍しいことである）、特定の地域内の利益や、地域内外の二項対立関係に還元されることのない活動を積極的に展開している。周辺地域、いわゆる「鳥取」が主題となる活動も含まれてはいるものの、それらは周辺地域の見過ごされがちな自然や風景との対話、あるいは、なによりも人々が求める地域像とは全く異なる物語を描いていく。これまでに関与してきた多くのアーティストやプロジェクト、例えば、悪魔のしるしによる「偽祭」の上演を通じた、地域振興や文化行政、観光政策・アートイベントへの批評。レオ・カチュナリックの人々の夢や欲望、死を介した、あり得たかもしれない現実の物語。守章の地域社会の日常を構成する、防災無縁に着眼した展示。mamoruの土地の風の音風景を知る

プロジェクト。生意気による「食べられる草」やピザ窯の制作を通じた庭づくりと人々の関係形成。ピル&ガリア・コレクティブの日本のモダニズムの相対化を通じた能楽上演。張小船の日常生活の規範の違和感の表出を通じた「治療」の可能性。……いずれも鳥取という地域や、日本という国家に関わる問題を取り扱いながらも、そこで展開するのは居心地が悪いものや、社会・政治的な緊張感を含むもの、「観光」のなかで注意を寄せられることが少ないものなど、あらかじめ地域内外の人々が期待することがないような地域や国家像である。そこに地域内外の人々が共同者として含まれることで、地域や社会の潜在的な可能性が再発見されていくのだ。それらは特定の地域の個性化（と優越）という競争のための視点ではなく、主体と客体の可逆的な関係性に向けて開かれた共有による文化生産を重んじる態度である。わかりやすい地域活性化のためではない、しかし地域に新たな価値をもたらしうるアートを選ぶこと。小さな活動であっても、それを通じてより大きな社会の問題や世界に通底する問題に人々が気づくためのきっかけとなること。そしてなによりも、固定化されない人々の参加や連帯によって地域の固定化した主体性を脱構築していくこと。こうした限定された「地域」を超えた広く社会や世界を捉える視座のなかから、人々の新たな創造や地域の新たな可能性を引き起こすことが、その活動には含まれている。

生み出される多くの物語に向けて

本稿ではホスピテイルプロジェクトの取り組みを見ながら、特に、そのアートと社会との結びつき方について思考をめぐらせてきた。ここで私がもっとも主張したかったことは、アート



界の箱庭化に疑いを持たない立場や、人々の表現や主張を無批判に全て認めようとするような態度、あるいは、わかりやすい地域振興のための観光や経済への寄与によってのみアートの価値を測ろうとする立場から、ホスピテイルの実践をみなすべきではないということだ。なぜならホスピテイルプロジェクトは、啓蒙的なアートの人々に見せるためではなく、人々に多様な価値観をもたらすための実践によってアートの意義を示し、それを通じて期待される地域像とは異なる別の回路によって、**私たちが新たな町、社会、世界をつくり上げていく可能性をひらくための場であるからだ。**

これらの取り組みは、理念上のことであるとともに、同時に実践によって示されてきた意義としても注目すべきことであることを最後に述べておくべきだろう。ホスピテイルはフィロソフィーとともに、一つ一つの状況に対する実践の繰り返しによって構成されてきたものであるからだ。私は、このホスピテイルプロジェクトが、多くの地域内外の市民たちに得がたい価値観をもたらし、新たな行動を引き起こすさまを目にしてきた。プロジェクト開始後、6、7年経ったころのことである。ある学生が急に、「ここに出会えたことに、本当に感謝しているんです。人生が変わったから」と、話し始めた。その学生は（多くの現代の学生たちがそうであるように）自分の居場所、そしてなにより日常のつまらなさを感じていた。ところが身近にあるミュージアムにもほとんど行ったことがなかった彼女が、偶然のきっかけからホスピテイルに関わりを持ち、「大



学では出会えなかった、面白い人との出会い」を通じて自らの考えが大きく変わったのだという。しかも、その刺激に楽しさを覚えたことから卒業後、ホスピテイルでの新たな活動を地域内外で仲間とひらき始め、さらには別のアートや文化活動にも自らの活動を展開させていったことも見逃すことができない。数値化できない物事の価値を低くみる人なら、一人の変化があったからといって全体の傾向を押し量ることなどできないというかもしれない。また、なにと出会っても人生は変わるものだ、と冷笑する人もいるだろう。だが私が鳥取に居住していたのは4年半のみだったにもかかわらず、幸いなことに多くの人々との関わりはその後のストーリーとともにあり、継続的な観察を通じて私は、彼女のようにホスピテイルを通じて「人生が変わった」学生や地域内外の市民に数多く出会った。その規模はたしかに小さなものかもしれないが、通常は直接出会うことすら難しい国内外のアーティストらと協働し、一緒に焼肉網や鍋を囲み、全く予想しないような景色や考えに触れることができるホスピテイルでの経験は、大規模な芸術祭や、都市におけるアートセンターなどではほとんど起こり得ないことである。そして、そのような一人一人が「人生が変わった」と思えるような経験が生まれる度合いは、少なくとも ミュージアム/ホール での展示や社会教育活動、あるいは大規模な予算を持つ芸術祭と比べて、ずっと大きく深いものだと言えるだろう。

もちろん、だからといって単にこのような場をただ見守っていればよいというのではない。私たちに必要な責務は、空間の維持やプログラム運営の困難を含むそこで生じる問題を、人々の共通利益を生むという意味における公共性の視点から真に捉え直し、位置付けることである。だが、このような実践を捉え理解を求めるのはやはり簡単なことではな

い。それは私たちの日常や常識に関わることでありながらも（だからこそ）、当初の期待を含む意味づけられた価値観や主観を描き直すことを要求するからである。そして、当たり前と思われる考えを裏切るような価値の提示や体験は、既存のアートや行政に関わる制度を切開し、再縫合することをも要求する。アートをめぐる **マネジメントや政策の常識の治癒を進める必要性も、そこでは求められているのだ。**しかしそれでもアートの価値と、それが生むはずの多くの人々の物語の可能性を私たちが信じるのであれば、ホスピテイルが示すその重要な意義を生かすための認識と制度上の線引きを描き直し続けていくことが重要なはずだ。



小泉元宏 Motohiro Koizumi

立教大学社会学部教授。長野県出身。2000年代を通じて、国際基督教大学（ICU）で音楽、美術を、東京藝術大学大学院で社会学、メディア研究、文化研究を学ぶ。その後、ロンドン芸術大学、大阪大学、ロンドン大学、鳥取大学等での研究・教育職を経て、現職。専門は社会学、文化政策研究。特に市民参加型の音楽、美術、演劇など諸芸術と、社会形成のかかわりに関する研究・実践に取り組んでいる。近著・近刊に、*Resilience as Heritage in Asia* (Amsterdam University Press, In Press) (共著)、[アートがひらく地域のこれから——クリエイティビティを生かす社会へ] (ミネルヴァ書房、2020年) (共著)、*The Rise of Progressive Cities East and West* (Springer, 2019)など。近年のプロジェクトに、東京芸術祭「ガチャガチャガチャ」（ディレクション・遠山昇司）における学生との共同リサーチおよび制作協力、「RE/MAP2.0」プロジェクト（シンガポール国立大学デザイン・環境学部建築学科シモヌ・シュエン・チョン・スタジオと共催）など。器楽の指揮者や音楽指導なども務めている。

- [1] アートプロジェクトの定義の検討は、吉田隆之『トリエンナーレはなにをめぐすのか——都市型芸術祭の意義と展望』水曜社、2015年。などに詳しい。ここでは批判的な論も含めて共有されている概念として、熊倉純子らによる「現代美術を中心に、おもに一九九〇年代以降日本各地で展開されている共創的芸術活動。作品展示にとどまらず、同時代の社会の中に入り込んで、個別の社会的事象と関わりながら展開される」という定義を用いることとする（熊倉純子監修、菊地拓児・長津結一郎編集『アートプロジェクト——芸術と共創する社会』水曜社、2014年）。また、芸術祭とアートプロジェクトは、同義的に扱われることもあるものの、ここでは芸術祭とは一定期間開かれる芸術文化事業、アートプロジェクトとは上記のような社会的相互行為を含む文化活動として区別する。
- [2] たとえば、ショシャナ・スボフは、GoogleやFacebookなどの企業は人々の行動データなどの個人情報をもとに人々の活動や政治的意思を操り、そして人々の自然（ネイチャー）と、互恵的な関係を破壊して、人間の主権性を転覆させ、民主主義の分裂を引き起こしていると述べる。ショシャナ・スボフ『監視資本主義——人類の未来を賭けた闘い』野中香方子訳、東洋経済新報社、2019=2021年。
- [3] かないみき「ヒワ・K インタビュー」『美術手帖』2019年12月号（特集＝「移民」の美術）pp.104-109。
- [4] 赤井あずみ・尺戸智佳子・杉原環樹「もしもし、キュレーター？——第4回どうせ学ぶのであれば、誰かと一緒に学びたい【前編】」artscape (https://artscape.jp/study/moshi/10180279_21766.html) (accessed September 1, 2024)。
- [5] ホスピテイル・プロジェクト「ホスピテイル・プロジェクトとは」(http://hospitale-tottori.org/about/) (accessed September 13, 2024)。
- [6] ヘンリー・ジェンキンス『コンヴァージエンス・カルチャー』渡部宏樹・北村紗衣・阿部康人訳、晶文社、2006=2021年。Henry Jenkins, Mizuko Ito, and danah boyd, *Participatory Culture in a Networked Era: A Conversation on Youth, Learning, Commerce, and Politics* (Polity Press, 2015)などを参照。
- [7] レフ・マノヴィッチは、インスタグラムが、大衆の中に新たな美学（デザイン写真、インスタグラムイズム）を生んでいることを指摘した。レフ・マノヴィッチ『インスタグラムと現代視覚文化論——レフ・マノヴィッチのカルチュラル・アナリティクスをめぐって』久保田晃弘・きりとりめでの訳編著、ピーエヌ・エヌ新社、2005=2018年。
- [8] 西垣通『集合知とは何か——ネット時代の「知」のゆくえ』中央公論新社、2013年、193頁。
- [9] ヨーゼフ・ボイスは、「社会彫刻」や「全ての人間はアーティストである」といった概念によって、アートの定義を、あらゆる人々が主体的・意識的に社会を「彫型」し駆動していく力であるとした。それは、多数の個の創造力の集合によって新たな社会の可能性を見出すための視座であるとともに、地球や人類社会の存続のためのエコロジーの思想に基づく主張でもあった。
- [10] 例えば、2023年にまとめられた「経済産業省史上初のアートに関する報告書」で、当時の経済産業大臣である西村康稔が、「アートを地域に取り込むことで、地域文化の創造、地域のブランディングによる観光需要獲得や二拠点居住等の促進、産業振興等が図られ、地域経済社会が活性化すると述べてつ、瀬戸内国際芸術祭など、複数のアートプロジェクトを課題克服の事例として挙げているように、アートプロジェクトの産業振興への貢献が重視されるようになってきている（経済産業省 アートと経済社会について考える研究会「アートと経済社会について考える研究会報告書」、2023年、6頁）。
- [11] ジョン・アーリ『観光のまなざし』加太宏邦訳、法政大学出版局、1990=1995年。

プロジェクトルーム

Project Room

旧横田医院館内に、人材の育成と交流のためのプロジェクト・ルームを設け、進行中のプロジェクト・プランの公開、これまで実施した事業資料等の閲覧、知己の文化事業に関する情報資料の収集・公開を行っています。アートを通じた人材育成プログラムの企画や、アーティストやキュレーターのリサーチによる新しい知のアーカイヴなど、実験的なプログラムを実施してきました。

オルタナティブな知の方法について考えるためのパブリック・トーク

「知るのつくりかた」

オルタナティブな知の方法について考えるためのパブリック・トーク「知るのつくりかた」は、2015年に山本高之とmamoruの2名のアーティストをディレクターに迎え企画開催した、フィールドワークやワークショップといった実践を通して、体験し、思考を深めることで新たな知を獲得するアートの学校「スクール・イン・プログレス2015」の続編にあたります。本プログラムでは、さまざまなジャンルで知の生産の現場に携わる方々がそれぞれの「知るのつくりかた」-取り組んでいる課題と知を構築するための実践について共有し、さらなる議論やワークショップを通じて協働による価値の創造を試みてきました。

「知るのつくりかた」を知ろうとする

mamoru サウンドアーティスト、School in Progress 共同ディレクター

赤井あずみ HOSPITALE キュレーター、プログラム・ディレクター

赤井あずみ（以下**赤井**）：「スクール・イン・プログレス」から派生した「知るのつくりかた」は、各人が蓄積してきた「知る」という活動についてのリサーチです。過去7回にわたって様々なゲストがmamoruくんのその時の興味関心に沿って選ばれ、ある種の「展開」をみせる大きなプロジェクトとも言えると思います。

mamoru：もともと「集合知」とか「暗黙知」というようなキーワードが気になり始めたところからはじまったように記憶しています。その結果、的に、7年の間、やれるときに、やりたいときに、話してみたい人と、が描いた断続的かつ軌跡的で歴史的なストーリーですかね。当然、なにか筋書きがあったわけではないという意味で、結果的に……な物語。

赤井：時にmamoruくんの作品と並行して、時に社会や時

代の空気を反映する流動性がまずその醍醐味で、それらと共振する感覚が知的な喜びになっているように思います。

mamoru：ものすごく個人的で分解不能な興味関心に宿る強度というのが「生きる」や「その人自身性」と密接に関わっている。と、同時に世界に対して開かれた態度を持つことで誰かとの交差点や、その交差点が誰かの興味をまたつなくことになるんじゃないか、とは思っていて。実際にレギュラー的に集まってくれる人達だけでなく、わりとギリギリのアナウンスにもかかわらず、少なからず意外性のある新規参入の方が毎回訪れてくれた。

赤井：私としては、AIRを開く、あるいは創造のプロセスを開くということがやりたいんだよね、やっぱり。

mamoru：そういうプロセスに他者を招き入れる際にいろいろなスタンスがあるけど、受注・発注関係的なもの、それよりもコラボレーションに近いがプロジェクトの完遂に必要な才能を指定するタイプ、はたまた偶然性やバグという感じの「X」な期待。いずれにしてもシンプルに興味関心を原点に、わりとそこから先は「えいや!」と踏み込める人でないかぎりは成立しない。

赤井：トークの時間が長いというのも、多分そのことに起因するのだと思います。時間をかけないと到達できない領域を目指していたり、その場所その時間で生起する「なにか」を待っていたり、あるいは「プロセスそのもの」を表出させる試みなのかもしれません。

mamoru：ゲストや自分の興味関心がむき出しになってあからさまになり、集まった人たちの声も交差し、時にそれぞれが持ち込んだ理解が変質したり、という瞬間。そういう時間が動き出すまでにはだいたい時間が必要。けど、その時間が訪れると質問や投げかける言葉が次々に湧いてきて、結局、時間切れで、その後の打ち上げやなんなら翌日朝まで……セッションが断続的に続くという事も常でした。

赤井：即興性やライブ感もまたこのプログラムの特徴のひとつなのですが、それはmamoruくんの作品のスタイルが大いに影響しているというか、共通していることかなと思います。

mamoru：厳密には不可分領域でしょうね。何年もかけてリサーチしているときも、長いとはいえないイベントとして圧縮された時間の中でも、パフォーマンスのステージ上の僅かな時間でも、「知る」が生まれたり、生まれそうな感じの独特な時間を経験する、その瞬間は一回性と不可逆性に満ちている。

赤井：静かで長い（耐久性がある）んだけど、低い振動から発せられる熱が確かにある。

赤井：ちなみに、毎回のトークの際には前半後半の間に30分間のコーヒープレイクを入れますが、そこで提供するおやつとドリンクに、おそらく他のどんなトークイベントよりも力を注いでいます。インテンスでコンデンスな時間の合間に糖分とカフェインを投入して、働き過ぎた脳みそを喜ばせつつ、参加者同士の会話も活性化させるという……。

mamoru：この会に限っては(?)タイムキーパーはいない。そもそもニッチなのだから、せっかく集まったんだから、1時間も2時間も?3時間も?!4時間も!!(可能なら)変わらないよね。というのは無理筋な帰納法だけど、集中が途切れる時間、内省スイッチが入ってしばらくアローンに思考する時間もイベント中に起こりうる。ふと、意識が会に帰ってきたときに、また発言し質問する。

赤井：詰まるどころ過剰な享楽が、このプログラムの本質といえそうなかもしれません。少なくとも私にとっては。

mamoru：わたし(たち)の「知るのつくりかた」の核心には、多分にmamoruのライブ性と、赤井さんの耐久性の混淆した状態があったんだな、と。

赤井：mamoruくんはホスピテイルでは最も来場回数が多いアーティストになると思うのですが、それはひとつのAIRの在り方でもあるのかなと。循環というか……そうそう、ライブハウスに近いのかな。世界ツアーの立ち寄り場所?

mamoru：インプットとアウトプットの循環という意味で言うと、「知るのつくりかた」では、プレゼンしまくって定型句になってしまったような完成された文言よりも、その場で交わされた言葉の先にある思いつきや、「そういえば最近思っただけなんだけど」という、フレッシュで不確かで、着地先の確定していないコメントや発言が許されていて、本番というよりもリハーサル的な、そういうセッションかもしれない。リハ自体の充実度のみでも、なにかしらの期待が持てたり気持ちよかったりすると空間全体がいい感じになるのと同じで、内容がそこまで自分と密接していなくて絡めなくても、そういう空気や熱量が後々、直接関係ない「知る」を触発したり、ひいてはそれぞれが「生きる」を確認する機会を作ったり、もしかすると後押しすることもあったかもしれない。

赤井：……というようなある種のゆるさとかノリのようなもの、またこのプログラムを支えている要因のひとつです。ゲストとホストが支援する側とされる側とか、あるいはどこか遠くの特異な存在としてのアーティストというのではなく、立場の別なくフラットに出会える場所、なにかを交換しあえる場所であってほしいと思います。

人類のわかっている範囲での理解の達成度を競わされて、右往左往して自分に与えられた短い時間を消費してる場合じゃないよ。人類は世界のことほとんど何もわかってないんだから。

山本高之 アーティスト、School in Progress 共同ディレクター

およそ 137 億年前から始まった宇宙の中に我々が住む地球が誕生したのが 46 億年前。その惑星に哺乳類が誕生したのが 2 億 3 千年前で、我々の祖先であるホモ・サピエンスがアフリカに出現したのがおよそ 20 万年前。そして約 6 万年前に世界中に広がっていった。

現在人類が宇宙についてわかっている範囲は 5% に満たない。我々は実際に暮らしている世界の 95% 以上のこと、つまりそのほとんどについて何が何だかさっぱりわかっていない……

私たちを取り囲む宇宙の理解の際でその不思議なあり方と格闘している専門家たちもまた、私たちと同じようにかつて、小学校や中学校（またはそれに類する場所）で、結構な時間を過ごしていたはずだ。そこでは読み書きや計算を、歴史や地理を、様々な生き物の生態を、段階を追って学んでいく。注目したいのは、それぞれの段階においては達成されるべき「正解」が設定されていることだ。学校とはその時点で大人がわかっていることを子ども達に教える場所なのだから、各教科の到達の度合いを測ることも可能なのである。

小・中学校の 9 年間、先生と生徒／児童の間で繰り返される、その時点で大人がわかっている範囲の理解度を測るルーティンの中で各教科の内容とともに、未知のもの、答えの確定していないものをとりあえず遠ざけておくような態度もまた「学習」される。

ここで学校に通い出す前、幼少期の自身の記憶を遡ってみる。夜中にひとり目覚め、真っ暗な闇の中で感じた不安、デパートの人混みの中で親とはぐれた時に感じた不安。これらは、このテキストの最初に書いた世界のあり方を正確に認識できていたからではなかったか。

長い学校生活を送る中、それぞれの発達段階において子ども達の中に芽生える承認欲求は、未知のものと繋がっていた彼らを管理可能な存在にするために大人によって利用されてはいまいか。

私たちが「スクール・イン・プログレス」において目指したのは、私たちを取り巻く未知のもの（≒世界そのもの）に参加者とともに出会う経験の機会を作ることだった。プログラ

ムを考えた mamoru と山本、レクチャーを行う白川は普段アート作品を制作している。アート作品は、普段気づかなかった、忘れていた感覚を、日常の外側を、こうでなかった世界の可能性を想像する力を私たちに与えるものだ。

この「学校」には教えるものと教えられるもののヒエラルキーは存在しない。我々「講師陣」も含めてそこに集まった全員が色んな意味での未知のものに出会う機会を作り出すことを目指した。

例えば mamoru と共に海に向かい、サーフボードで波に初めて押されてみる。汗だくで古武術をやってみる。山本が車を買いたいという理由で企画した「授業」では、参加者はそれぞれ色々なカー・ディーラーに赴き、それぞれの車メーカーの車作り、車の売り方に触れることになる。

参加者は、自転車に初めて乗れるようになった時の世界が広がる感覚、身体が拡張していく感覚をシャワーで砂を洗い流しながら反芻していただろうし、興味のない人にとってはどうでもいい車メーカーのこだわりポイントとそれへの愛（または愛のなさ）を知った。



山本高之 Yamamoto Takayuki

1974 年愛知県生まれ。愛知教育大学大学院修了後渡英、チェルシー・カレッジ・オブ・アート・アンド・デザイン MA 修了。小学校教諭としての経験から「教育」を中心テーマのひとつとし、子どものワークショップをベースに会話や遊びに潜む創造的な感性を通じて、普段は意識されることのない制度や慣習などの特殊性や、個人と社会の関係性を描きだしてきた。近年は地域コミュニティと協働して実施するプロジェクトや、一般を対象としたオルタナティブなアートスクール・プログラムにも取り組み、鳥取でのスクール・イン・プログレスの共同ディレクターや「国際芸術祭あいち 2022」ラーニング・キュレーターを務めた。主な展覧会にコチ=ムジリス・ビエンナーレ（インド、2016）、「山本高之とアーツ前橋のビヨンド 20XX 展 未来を考えるための教室」（アーツ前橋、2019）など。近著に『芸術と労働』（共著、白川昌生+杉田淳編、水声社、2018）がある。

廃病院を活用した鳥取のアートプロジェクト「ホスピテイル」 ——その始まりと影響

野田邦弘 横浜市立大学大学院都市社会文化研究科客員教授、元鳥取大学地域学部教授

私は横浜市職員時代、文化政策やまちづくりの仕事に多く関わった。1980年代には倉庫など非劇場空間=オルタナティブ・スペースを会場に、市民や市職員のボランティアと一緒に手作りの演劇・ダンス等の公演を行った。この経験・ノウハウの蓄積は2004年から始まるアートプロジェクトBankARTにつながる。BankART 1929周辺にはアーティスト・クリエイターが続々と集まり「創造界限」が形成され、衰退の始まっていた旧市街地関内地域の再生に貢献した。

2005年鳥取大学に転職して鳥取でも横浜と同じような取り組みをやりたいと考え、鳥取県の「とっとり『知の財産』活用推進事業」の予算を活用して県内の空き施設の実態調査を行った。この調査で出会ったのが、倉吉市の旧明倫小学校舎と鳥取市の旧横田医院だ。

最初に旧明倫小学校校舎の保存活用に向け、鳥取大学の「地域調査実習」という授業を通じて同旧校舎でアーティスト・イン・レジデンス（AIR）に取り組んだ（明倫AIR）。坂本鹿名夫設計の円形校舎は、DOCOMOMO Japan「日本におけるモダン・ムーブメントの建築」にも選ばれた優れたデザインの建物である。明倫AIRは大学が活動から撤退したあと住民によって継続された。一方、NPO法人明倫NEXT100は、同校舎の保存活用を求める署名活動行い、多くの署名を集め市に提出した結果、市は解体の方針を撤回した。そして2018年「円形劇場くらしフィギュアミュージアム」が誕生した。現在グッドスマイルカンパニー、海洋堂、米子ガイナックスの協体制得ながら、明倫NEXT100が設立した会社が経営にあたっている。

鳥取市で取り組んだ地域調査実習がホスピテイルプロジェクトである。鳥取駅から徒歩5分の3階建ての廃院旧横田医院（1956年建設）が拠点となった。この建物も「知の財産」で調査した際に出会ったものであった。旧横田医院を活動拠点に選んだのは次の理由による。

- ① 中心市街地という好立地
- ② 施設規模の大きさ（通常の空き店舗や空き家より大型

建築物である）

- ③ 廃院という来歴（ゲニウスロキ、病気を治すという商業店舗と異なる公共的機能）
- ④ 円形建築というデザインのユニークさ
- ⑤ 地域住民にとって身近で愛着のある存在だったと推測される点

さっそく私は、東京在住の施設オーナーに施設の使用をお願いした。オーナーには「大学として公共的な活用をするのなら無償で貸してもよい」と了解していただき準備に入った。大学側の担当は、野田邦弘、小泉元宏、故榎木久薫、企画運営を取り仕切るディレクターは赤井あずみ。大学予算、県の補助金、文化庁の予算などを活用しながら活動をスタートさせた。

2012年のオープニング企画は地元メディアも大きく報道し、多くの来場者があった。来場動機は、①アートの鑑賞、②円形病院というユニークな建築を見に来る建築ファン、③当時の入院患者など病院に関係のある人で、10%が県外からの来場者であった（来場者アンケート）。

翌年2013年秋、ホスピテイルの至近距離にある旧「とめや旅館」（1953年建設、延べ床面積約200平方メートルの元遊郭）で、アーティスト等の滞在、鳥取大学や鳥取環境大学の学生のコワーキングスペースなどの機能をもつ「ことめや」がスタートした。鳥取市が実施した同施設の活用アイデアコンペで鳥取大学の学生の案が採用されたことがきっかけであった。ことめやは、ホスピテイルと連携しながら活動を継続している。ここでは、施設オーナーが自分もプレイヤーの一人として、学生達と一緒にプロジェクトに楽しみながら参加している。

ホスピテイルは「アーティストリゾート」を掲げる鳥取県の事業（アーティストリゾートとっとり推進事業、2015年）にも位置づけられ、事業基盤をより強化した。鳥取県は、AIRを全県に広げるため「鳥取藝住祭」を2014年度と2015年度に開催した（野田は実行委員長を務めた）。「地域の空

き施設×地域人材×アーティスト」という基本フォーマットにもとづき、地域で選出されたプロデューサー（地域人材）が企画し地元住民が運営するというプロジェクトに県が資金援助するというもの。県外への広報なども行ったため、鳥取県のAIR事業の噂は全国のアート界に広がった。その後県予算の削減のため規模は小さくなったが、県内のいくつかの場所でAIRは継続されている。2025年倉吉市に開館する鳥取県立美術館とAIRとの連携も求められる。

鳥取市は県庁所在都市（中核市）であるが、人口は18万人を切り、減少を続けている。商店街はシャッター通りとなっており、次第に活力を失っている。ホスピテイルを始めた理由は、旧横田医院を拠点にまちなかの空き店舗にギャラリーやアトリエといった創造・交流の場を広げ、アーティストやク

リエイターが集まる活気あるまちへと再生することである。そのためには、鳥取市として文化政策だけではなく、中心市街地再生、新たな経済産業政策、など分野横断型で総合的なまちづくり戦略が必要であろう。ホスピテイルはそのような創造都市づくりを牽引して欲しい。

アメリカニューメキシコ州サンタフェ市は、人口9万人の小都市であるが、人口の8%はアーティストである。また8つの美術館・博物館と200のギャラリー、60程度のホテルを有する文化観光都市である。同市の美術品の取引額は全米第3位となっており、アート市場が都市経済を支える基幹産業となっている。鳥取市が日本のサンタフェと呼ばれる日が到来することを夢見ている。

参考文献・サイト

円形劇場くらしフィギュアミュージアム <https://enkei-museum.com>

「元遊郭の旧旅館活用 ことめやプロジェクト始動」日本海新聞、2013年10月31日
鳥取県立美術館 <https://tottori-moa.jp>

野田邦弘（1988）「横浜のロフト文化の可能性 ヨコハマ・フラッシュをととして考える」横浜市『調査季報』98号、pp.17-24 https://www.city.yokohama.lg.jp/city-info/seisaku/torikumi/shien/tyousakihou/98.files/0002_20191120.pdf

野田邦弘（2001）『イベント創造の時代』丸善

野田邦弘（2008）『創造都市横浜の戦略』学芸出版社

野田邦弘（2014）『文化政策の展開』学芸出版社

野田邦弘（2020）「アートが地域を創造する」野田他編著『アートがひらく地域のこれから』ミネルヴァ書房、pp.46-67



野田邦弘 Noda Kunihiko

横浜市立大学大学院都市社会文化研究科客員教授（文化政策、創造都市論）、東京大学まちづくり大学院非常勤講師、文化経済学会（日本顧問）。前鳥取大学地域学部地域文化学科特命教授。

1951年福岡市生まれ。早稲田大学政治経済学部政治学科卒業。2004年まで横浜市職員として横浜トリエンナーレ等の文化事業の企画や文化行政を担当。2005年、鳥取大学地域学部教授に着任後は鳥取県内の文化行政に携わる。『文化政策の展開』（学芸出版社、2014年）『創造都市横浜の戦略』（学芸出版社、2008年）など著書多数。

遠く離れた鳥取のホスピテイルプロジェクトを囲む コミュニティとの豊かな 12 年間

金井美樹 アート・ジャーナリスト、ライター、リサーチャー

常夏の地、マレーシアで暮らしはじめてからもう 1 年が経つ。およそ 20 年も長居してしまったドイツから、ようやく離れることとなった理由はいくつもあり、この 1 年はそんな理由について考えを巡らせながら、東南アジアという新たなフィールドでの体験を咀嚼しようとしている。私のベルリン時代から 12 年ものあいだ、行けば刺激と癒しを同じくらしい分量でいただけて、離れているときには、何となしにふと心の支えとなってきたのが、鳥取のホスピテイルプロジェクトを囲むコミュニティかもしれない。

「はじめてのアート・プロジェクトトークシリーズ」は、キュレーターやアーティスト、コーディネーター、ジャーナリストなど、国内外のアートの現場で活動する人たちを迎え、彼らの実践について話を聞くホスピテイルのレクチャープログラムだ。その栄えある第 1 回目の登壇者として鳥取をはじめを訪れたのが、2012 年の秋だった。ベルリンを拠点とし、ヨーロッパのアートシーンについて、主に日本のメディアで執筆していたものの、さほどの知名度もない私の活動に興味を持ち、このトークシリーズにこれまで 5 回も呼んでくださっているのは、鳥取博物館とホスピテイルのキュレーター、赤井あずみさん。私は形式的にトークをしに行くと言うよりも、その場で出会う人たちと、自分が見聞きしたことや考えたことを共有しながら、時間すら気にせず遠慮なしに話ができることを楽しみにしてきた。赤井さんが、そこでいつもつくる雰囲気は温かく、親密だ。トークがはじまる前、集まってくる地元の方々に声をかける赤井さんの姿を見ながら、そこにいる人たちが誰なのか、何をしている人なのかを知ることができる。学生やアートに興味のある人、実際にアート関係の仕事をしている人、イベントを聞きつけてふらりと来た人、おそらくただただ赤井さんに会いたくて来る人もいると思われる。

ヨーロッパを拠点としていたころのトークでは、当時「世界のアートの中心地」と言われ、世界中からアーティストが移り住み、そのシーンも盛り上がっていたベルリンの、オルタナティブ・スペースやアート・プロジェクトの話題を中心に伝えてきた。

ヨーロッパのノマド型ビエンナーレ「マニフェスタ」や、地域へのアプローチが先鋭なノルウェー・ベルゲンのトリエンナーレ「ベルゲン・アッセンブリー」などの取り組みから、国際展で交わされている議論を踏まえ、社会とアートの相関関係などを話し合ってきた。

今の私はマレーシアへ拠点を移し、アートとその周辺の作法が、想像以上に別様なものだとしみて分かってきたところだ。暮らしている人たちの人種も宗教も文化も多様であり、ヨーロッパとは気候もまるで異なるマレーシアへ来て、私のももの見方も大きく変化している。自分のここでの態度や立ち位置、アプローチの仕方、話し方や書き方についての不確かさを覚える。そんな体験を、直接的な対話という手段で、日本にいる人たちと共有したいと思っていたら、再び赤井さんがトークを企画してくれた。それが今年（2024 年）の 1 月のこと。マレーシアのアーティスト・ラン・スペースや、アート・フェスティバル、カフェを営みながらクリエイティブな活動をする教師やグラフィックデザイナー、音楽家たちの活動、そしてマレー半島の先住民族、オラン・アスリの文化的な営みなどを紹介しながら、これまでの西洋中心主義的な私自身の視点に気づかされたことや、訂正されるべき日本のアート・メディアのそうした偏った考え方についても話した。トークの後、全く異なる土地へとまた拠点を移した私の勇気に感銘を受けたという方は、生きる姿勢のようなものについて考えている様子だった。ホスピテイルプロジェクトの本拠地である旧横田医院は、ときおり帰ることのできる「家」のようでもある。

12 年ものあいだ、ヨーロッパから、そして今となっては東南アジアから、この家へと帰るたびに、赤井さんは親戚でも紹介するかのようになり、鳥取に暮らすたくさんの魅力的な人たちと私を引き合わせてくれた。鳥取に移住したてで「本屋をやりたい」と言っていた個性的な青年、モリテツヤさんは、それから数年後、彼らしいユニークでエッジの効いた本屋「汽水空港」をオープンさせた。何度目かに鳥取を訪れた際に手にした ZINE「ラクダを買ってひとり旅」——ラクダでインド

を旅したおかしくも感動的な実話の作者、浦林真大さんは今、ほっこりする美味しいカレー屋、「せかいのまんなか本部」や屋台、イベントをまわしている。鳥取に U ターンをして開業したプロダクト・デザイナー、川崎富美さんが暮らす、田んぼを望む古民家を補修した、味わい深い大きなご自宅におじゃましたこともあった。「トットリノススメ」というイベントを開催し、家具や店舗の内装を手がける工房を営む本間公さんの会話や、彼の子供たちの成長を見たり聞いたりすることも嬉しかったりする。赤井さんが運営する旧旅館であるプロジェクトスペース、「ことめや」に泊まれば、そこで出会いもまた広がった。最後に鳥取を訪れた時には、トークの前日に浦林さんの「せかいのまんなか本部」へ行くと、コレクターの小倉覚さんやアーティストの杉森康行さんと出くわし、初めましてながらも語らえば、翌日の私のトークへ行く予定だったという。ホスピテイルプロジェクトが紡ぐ緩やかなつながりが、街の中に日々、顔を出しているようだった。そのトークの後では、ゲストハウスやホステルを経営しながら、多くのイベントを企

画し、ホスピテイルプロジェクトにも関わる蛇谷りえさんが、「能登半島地震について何ができるか相談する会」に招いてくれた。

もう何年も前になるが、ベルリンのギャラリーのオーナーにインタビューをした際に、彼が圧倒されたある展覧会のオープニング・パーティーでの雰囲気についてこう言っていた。「階級や貧富、知名度の差、職種などを問わず、アートを前にしてそれについて話すことさえできれば、そこに集まる人たちとの隔たりなど感じないミクロコスモスのよう」。ホスピテイルプロジェクトも、まさにそんな場所だ。しかし、ただ街の中にアートスペースがあり、プロジェクトが運営されているのではなく、そこで育まれた街の人たちとの関係性が、とてつもなく豊かなのだ。そこへまた新たに、どこからともなくあまねく人が加わり、そのコミュニティが変化しながら育っていく。その過程は自発的でゆったりとしていて、鳥取の自然の流れと融和していくようにさえ見える。鳥取の風景のなかに、ホスピテイルプロジェクトがあり、生活とアートがあり、人が活きている。



金井美樹 Kanai Miki

アート・ジャーナリスト、ライター、リサーチャー。ロンドン大学ゴールドスミスカレッジ美術史修士課程修了。およそ 20 年にわたりベルリンを拠点に欧州 20 カ国からアートの現場をレポート。『美術手帖』や『芸術新潮』、『ART iT』などの日本のアート・メディアを中心に、書籍やウェブサイト、展覧会のカタログでの執筆や編集をはじめ、展覧会のコーディネーターなどを通してヨーロッパのアートシーンやアーティストの活動を日本へ紹介してきた。2023 年より東南アジアを拠点に活動。美術評論家連盟ドイツ支部会員。

新たな知を獲得する「社会教育」の場としての ホスピテイル・プロジェクト

竹内潔 鳥取大学地域学部准教授

JR 鳥取駅から目抜き通りを北へ、県庁のある久松山方面に向かって歩く。その途中の路地を入ったところに、「旧横田医院」はある。私が初めてそこを訪れたのは、まだ社会人大学院生をしていた 2013 年 3 月、鳥取大学で開催された日本文化学会年次研究大会の関連企画に参加するためだった。開始時刻は夜の 9 時頃。暗闇の中、独特の曲面を持つ壁に切られた四角い窓から、光が漏れている。敷地はブロック塀と工事用の鉄塀で囲われ、鉄の扉がひとつ、辛うじて開かれていた。手元の地図とあたりを見比べながら、その扉の前を 2 度ほど通り過ぎたのち、意を決してその中へと足を踏み入れた。建物内には既に人が集まっており、扇形に仕切られた部屋のいくつかで、天井からつるされた裸電球の光の下で、ひざ詰めの議論が行われていた。日中の大学の教室での分科会とは異質な空間で、濃密な時間が流れているように感じられたのを覚えている。

それから 4 年後、縁あって鳥取大学地域学部に着任し、ホスピテイル・プロジェクトにも直接関わるようになった。その時点で既に活動の幅は広く、レジデンスプログラムを筆頭に、地域コミュニティも意識した多彩なプログラムが展開されていたが、2018 年から地域学部附属芸術文化センター主催（文化庁予算による）のアートマネジメント講座の一環に「スクール・イン・プログレス」を位置付けて 3 年連続で実施した。「実践を通して体験し、思考を深め、新たな知を獲得するオルタナティブなアートの学校」を謳うこのプログラムは、アーティスト 2 名を共同ディレクターとし、多彩な講師陣を迎え、少人数の参加者とともに約 1 週間に及ぶ合宿形式でリサーチ・レクチャー・ワークショップ等を重ね、成果発表まで行うものであった。アーティストが主体で滞在制作を行い、その過程を一般市民らから垣間見えるようにするレジデンスプログラムとは異なり、受講生が主体となり、ディレクター・講師陣が提供する視点や問いを追体験しながら、受講生自身が何らかの気づきを得ていく構造となっている。そこに、あらかじめ用意された答えはなく、獲得できる知識や技能と言うも

のも明確ではない。しかし、そこではそれなりの高確率で「何か」の感触を得ることができる。

私が関わった「スクール・イン・プログレス」では、「身体性」がひとつのキーワードになっていた。プログラムとして、古武術を体験したり、ストレッチをしたり、アーモンドを 100 回噛み続ける、という講座が用意されたこともあった。なかでもサーフィンは恒例化しており、たいていが初心者である参加者が、ままならぬ自然の波と対峙し、徐々にボードの上に立って波と一体化する感覚をつかんでいくという体験は、強いインパクトを残すことがわかってきた。しかし、「だから、みんなサーフィンをすればよい」とはならない。2020 年度は、コロナ禍の中でそれまでの「スクール・イン・プログレス」を振り返る内容で、ひとつの区切りとなった。

美術館は社会教育施設たる博物館の一種である。社会教育の特質のひとつとして、「非定型性」が指摘されることがある。「学校教育」は制度がきちんと定められ、形式・内容等の面において「型」が定まっているのに対し、そういった型がない、またはゆるいのが「社会教育」だ、という理解である。美術館（博物館）は、老若男女が美術に触れ、自由に学んだり学ばなかったりする「ゆるい」教育施設だが、一方で、施設設備要件が定められ、学芸員という専門職があり、一定の専門性に基づきコレクションが収蔵され、ある種の権威付けがなされているという意味で「定型的」ともいえる。

人々の学び—知の獲得、創造—やそれを支える営みが「教育」だと広くとらえると、それを意図的・計画的・効率的に行おうとするのが「学校教育」であり、「社会教育」はその代替（オルタナティブ）ないし残余の学びの営みのことであり、広大・茫漠とした領域を指すこともある。ただ、一般には、「社会教育」は公立の社会教育施設（公民館・図書館・博物館等）に代表される自治体の社会教育行政によって提供されるものが名指されることが多く、制度化されたそれらのサー

ビスに限定されるものとして理解される傾向がある。

繰り返しになるが、私の理解では、広義の「教育」は、「学校教育」に限られないのはもちろんのこと、その外にある「社会教育」を含み、狭義の（制度化された）「社会教育」にとどまらない「学び」の営みをも含む。

「スクール・イン・プログレス」は、近代的な「教育」概念において見落とされがちな非定型な教育的営みが定型化され、学校（School）となる過程（in Progress）を再現する実験的取り組みであったといえよう。

モダニズムの薫りをまとったままタイムスリップしてきたかのような円形の医院が、近代化・定型化の行きつく先で岐路に立つ「教育」についての省察を促す場になっているように感じられる。これからもこの場所を拠点に、教育や社会や世界について思考を深めてみたいと思う。



竹内潔 Takeuchi Kiyoshi

鳥取大学地域学部准教授（文化政策論／創造地域論）
東京大学教育学部で社会教育を学び、2003年から出身地の茨城で県職員として勤務。10年余りの奉職中、医療行政と税務に携わった後、財団法人地域創造（東京）へ派遣となり、全国の公立文化施設の支援に関わる。文化振興担当として戻った茨城で東日本大震災に遭遇したのを機に文化政策研究の道へ転じ、2017年から現職。共著書に『アートがひらく地域のこれから』（ミネルヴァ書房、2020年）、『新版地域政策入門』（ミネルヴァ書房、2019年）、『社会教育の施設論』（学文社、2015年）ほか。

HOSPITAL PROJECT. Archive 2024

